

福岡市西区

青木遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集

1987

福岡市教育委員会

青木遺跡 正誤表

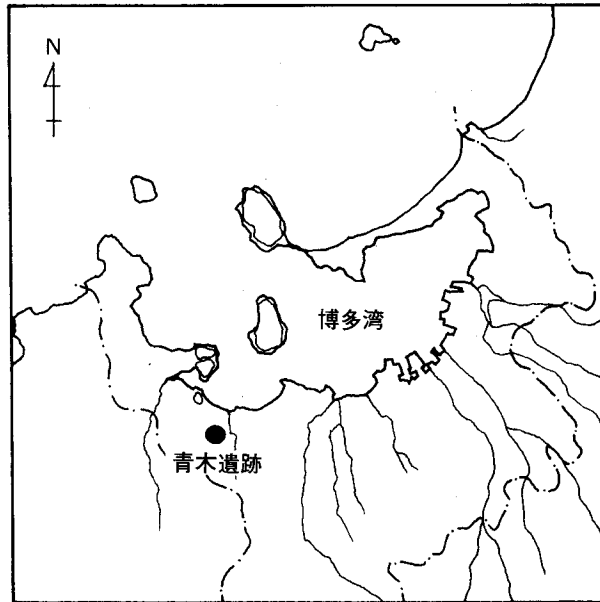
頁	行	誤	正
6	22	第1図	第5図
	25	"	"
	29	"	"
7	3	"	"
	7	片	細片
10	8	第2図	第6図
	1	"	"
	7	"	"
	11	"	"
13	15	第3図	第7図
	3	第4図	第8図
	8	"	"
14	1	"	"
	4	第5図	第"図
	8	"	"
	12	"	"
	18	第6図	第10図
	22	"	"
17	26	"	"
	30	"	"
	3	約 cm	約10cm
40	3	判断	判然

挿図第5図から第10図の縮尺は1/100で、10mとあるのは5mの誤りです。

福岡市西区
青木遺跡

福岡市西区今宿青木所在遺跡の調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集



遺跡略号 AOK
遺跡調査番号 8410

1987

福岡市教育委員会

序 文

今津湾に臨む今宿地区は、弥生時代の石斧製作址として名高い今山遺跡、数多くの前方後円墳など貴重な文化財と自然に恵まれています。

昭和60年に、福岡市西区今宿青木で西消防署建設に伴い、遺跡の記録保存を目的に発掘調査を実施しました。本書はその調査の記録を報告するものです。当調査区域が属する青木遺跡ではこれまで未製品を含む玄武岩石斧が採集されており、今山石斧製作址との関係が注目されていました。今回の調査では、弥生時代と中世を主とする集落の一部が検出され、石斧製作に関する貴重な資料も得ることができました。

本書が市民の皆さまに文化財に対するご理解を深めていく上で広く活用されるとともに、学術研究の分野において貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表すものです。

昭和62年 3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例 言

1. 本書は福岡市消防局総務部管理課による福岡市今宿青木の西消置の建設に伴い、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が1985年3月と5月に発掘調査を実施した青木遺跡の調査報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は二宮忠司、佐藤一郎、撮影は二宮があたった。
3. 本書に掲載した遺物の実測・撮影は、佐藤、山村信栄があたった。
4. 製図は佐藤、山村、藤村佳公恵が行なった。
5. 本書の執筆は、Ⅲ-4石器の項を山村、他を佐藤が行なった。
6. 本書に使用する基準方位は磁北で、真北との偏差N6°40'Wである。
7. 本書の編集は佐藤が行なった。

本文目次

序

I	はじめに	1
	1. 調査にいたる経過	1
	2. 調査の組織	1
II	遺跡の立地と周辺の遺跡	3
III	調査の記録	6
	1. 調査の概要と経過	6
	2. 検出遺構	6
	・掘立柱建物	6
	・竪穴住居	17
	・土壇	18
	・甕棺墓	23
	・溝	24
	3. 出土遺物	25
	・土器	25
	・石器 土製品	29
IV	小 結	40

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	2
第2図	青木遺跡群全体図	4
第3図	発掘調査範囲の周辺地形図	5
第4図	掘立柱建物配置図	7
第5図	掘立柱建物実測図(1)	8
第6図	掘立柱建物実測図(2)	9
第7図	掘立柱建物実測図(3)	10
第8図	掘立柱建物実測図(4)	11
第9図	掘立柱建物実測図(5)	12
第10図	掘立柱建物実測図(6)	13
第11図	竪穴住居実測図(1)	15
第12図	竪穴住居実測図(2)	16
第13図	土壌実測図(1)	17
第14図	土壌実測図(2)	19
第15図	土壌実測図(3)	20
第16図	土壌実測図(4)	21
第17図	土壌実測図(5)	22
第18図	土壌実測図(6)	23
第19図	甕棺墓実測図	24
第20図	掘立柱建物・柱穴出土土器実測図	25
第21図	土壌SK10出土土器実測図	26
第22図	土壌出土土器実測図	26
第23図	溝出土土器実測図	27
第24図	甕棺実測図	28
第25図	出土石器実測図(1)	30
第26図	出土石器・土製品実測図	31
第27図	出土石器実測図(2)	33
第28図	出土石器実測図(3)	34
第29図	出土石器実測図(4)	35
第30図	出土石器実測図(5)	36
第31図	法量比較図	37
付 図	青木遺跡全体図(1/200)	

図 版 目 次

- 図版 1 (上) 調査前(西から) (下) 調査前(東から)
- 図版 2 (上) 擁護壁部分調査区西側(南から) (下) 擁護壁部分調査区西側(北から)
- 図版 3 (上) 擁護壁部分調査区北側西半部(西から) (下) 擁護壁部分調査区北側中央部(南から)
- 図版 4 (上) 擁護壁部分調査区北側東半部(西から) (下) 擁護壁部分調査区北側東半部(東から)
- 図版 5 (上) 擁護壁部分調査区東側(北から) (下) 擁護壁部分調査区東側北半部(南から)
- 図版 6 (上) 擁護壁部分調査区南半部(北から) (下) 擁護壁部分調査区東側南半部(南から)
- 図版 7 (上) 調査区全景 (下) SB05・06と周辺の遺構
- 図版 8 (上) 調査区東南 (下) SC02と周辺の遺構
- 図版 9 (上) 調査区南側中央(西北から) (下) SB07・14・15(北から)
- 図版10 (上) SB08(西北から) (下) 調査区東南(西北から)
- 図版11 (上) SK01(西から) (下) 甕棺墓(南から)
- 図版12 土壌・柱穴・溝出土遺物
- 図版13 溝出土遺物
- 図版14 甕棺
- 図版15 石器類(1)(旧石器～中世)
- 図版16 石器類(2)(有孔石錘)
- 図版17 石器類(3)(石斧類一括資料)
- 図版18 石器類(4)(石斧類)
- 図版19 石器類(5)(石斧・敲打具類)
- 図版20 石器類(6)(砥石類)

I はじめに

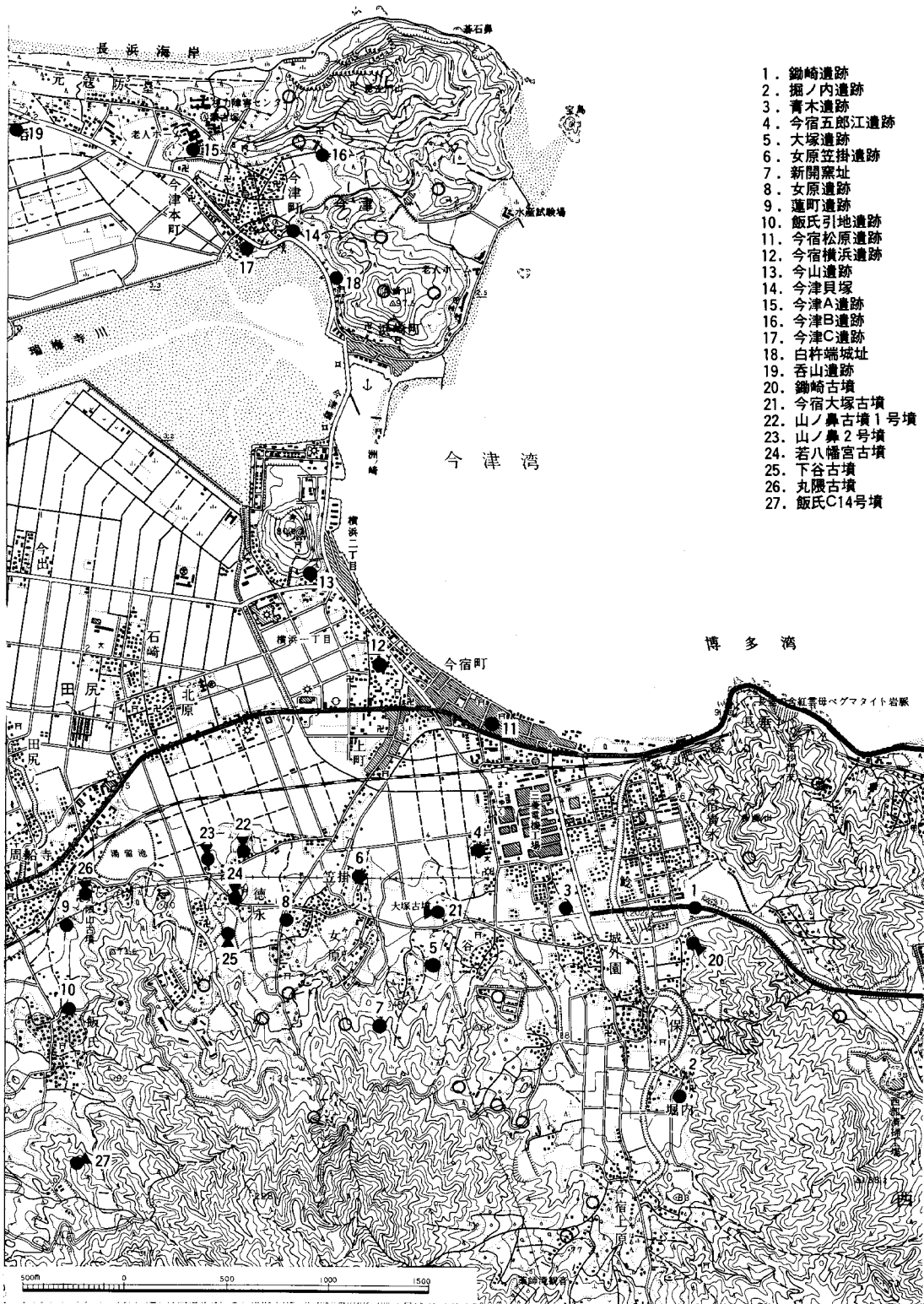
1 調査にいたる経過

福岡市西区の行政区の分区(西区、早良区、城南区)は、急激な人口増によるもので、各区ごとの施設の充実は住民から懇願されてきたところである。福岡市西消防署の分離新設は、災害事故の防止、対応迅速化のため必要不可欠であり、その建設工事も緊急性を要するものである。分区以前の西消防署は早良区に所在するため西区に消防署を新設する必要性が生じ、福岡市土地開発公社ではこれを受けて、西区大字今宿字小島に用地を取得した。建設工事着工に先立ち、消防局総務部管理課から教育委員会文化部文化課に埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあった。建設予定地は、低丘陵に立地し周知の青木遺跡群の東端にあたる。文化課では、遺構の有無の確認、調査対象区域の設定のために試掘調査を実施した。その結果、建設予定地内の南半では現況の水田耕作土のすぐ下から、地山の明赤褐色～明黄褐色土となり後世の削平によって遺存の状況は良くないものの、ほぼ全域面積に遺構が確認された。人命にかかわる消防署という性格上、その建設工事は緊急性を要し、発掘調査は建設工事に追われて進行し、擁壁部分等の調査は、3月1日に開始し、3月15日に終了、庁舎の部分の調査は、5月16日に開始し、5月30日に終了した。

2 調査の組織

調査委託	福岡市消防局総務部管理課
調査主体	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係
調査総括	埋蔵文化財課長 柳田純孝 第1係長 折尾 学
事務担当	岸田 隆
調査担当	山崎龍雄 松村道博(試掘調査) 二宮忠司 佐藤一郎(発掘調査)
発掘作業	太田孝房 広田義実 三苦宗澄 有吉サダエ 池弘子 大庭友子 清水文代 杉村文子 末松信子 富永純子 中牟田サカエ 西島タミエ 西島初子 西納テル子 西納トシエ 能美八重子 原早苗 平田政子 松本愛子 松本澄子 松本トシエ 松本藤子 真鍋チエ子 山下サノエ 山本チエ子 吉岡員代 吉岡蓮枝 脇坂ミサオ
整理作業	飯田千恵子 太田頼子 尾崎京子 斉藤美紀枝 平田ミサ子 藤崎洋子 藤村佳公恵 真名子順子

このほかにも、多くの方々の、ご理解とご協力によって、調査が支障なく行なわれたことを、感謝します。



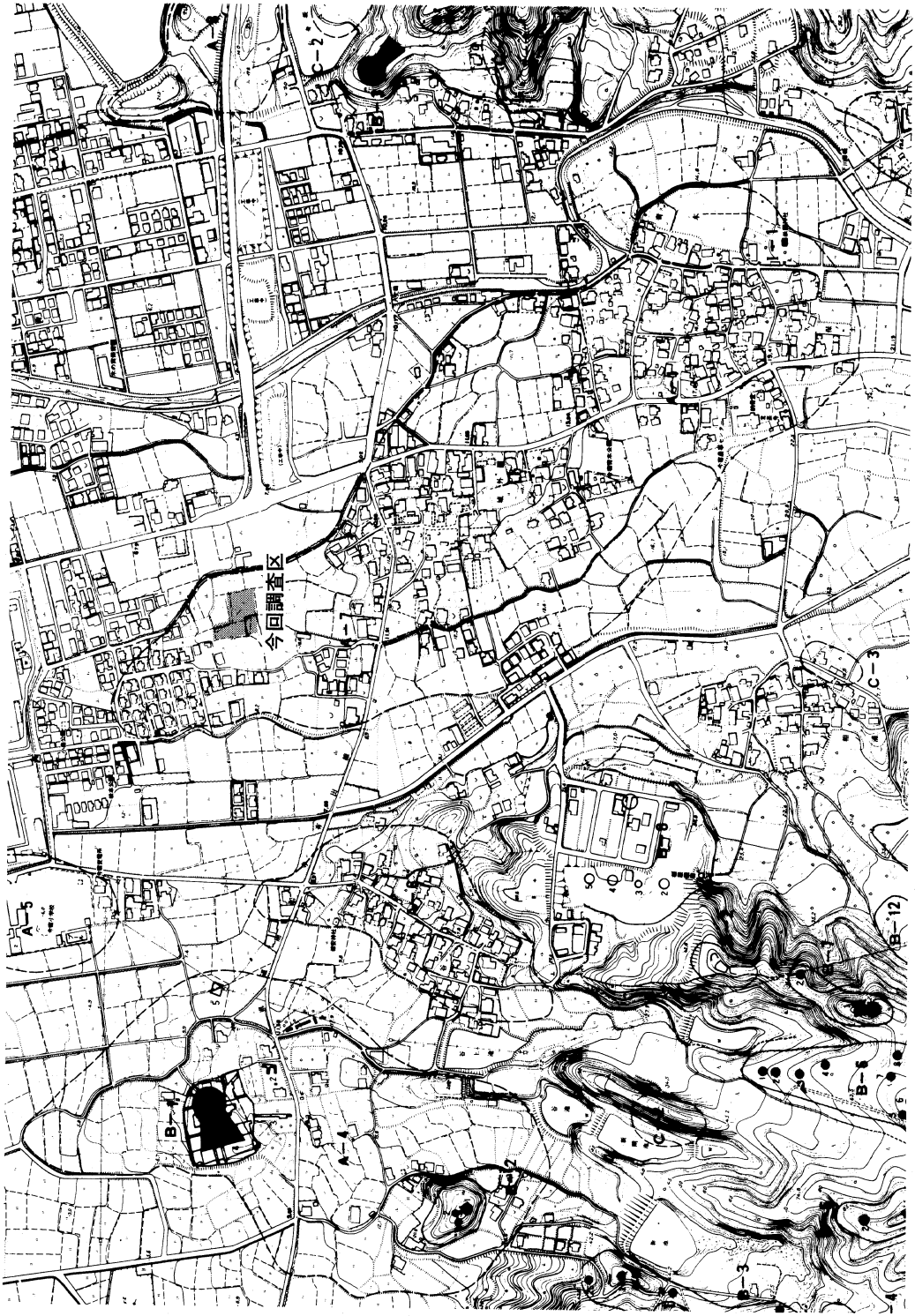
第1図 周辺の遺跡 (1/25000)

II 遺跡の立地と周辺の遺跡 (第1図)

青木遺跡は福岡市西区今宿青木に所在する。本遺跡の位置する今宿平野は糸島平野の東部にあたり、海岸砂丘に沿って形成された、平野の東を叶岳、長垂山塊、西を高祖山塊で限る東西約6km、南北約2kmの小平野である。本遺跡は高祖山北麓の低丘陵先端の低台地上に立地する。今宿平野とその周辺の丘陵部では数多くの遺跡が知られている。弥生時代では古砂丘北西端に位置する。今山遺跡では玄武岩製石斧の製作の開始期が前期末に遡る点などが、数次にわたる調査によって確認されている。⁽¹⁾今山遺跡から長垂へと伸びる砂丘上に位置する今宿遺跡群では、中央部で水道工事の立会調査の際に前期後半の壺棺墓等が検出された。⁽²⁾その北西部での第2次調査では壺棺墓と土壙墓からなる前期から中期にかけての墓地群が検出され、土壙墓から細形銅剣や勾玉などが出土している。⁽³⁾本遺跡の北西部の低台地上に位置する今宿五郎江遺跡では、中期後半から後期にかけての掘立柱建物を主として構成される環濠集落が検出された。⁽⁴⁾大溝から中期末から後期前半の夥しい土器に伴い小銅鐸が出土している。高祖山麓にのびる低丘陵の斜面にある大塚遺跡高田地区では、後期後半から古墳時代前期にかけての竪穴住居址群が検出された。⁽⁵⁾古墳時代では、高祖山北麓に東西約4kmにわたって12基の前方後円墳が丘陵先端や台地上に分布し、丘陵部には後期群集墳が分布する。集落遺跡では、先に述べた大塚遺跡高田地区、同Ⅲ・Ⅳ区、⁽⁶⁾女原遺跡⁽⁷⁾で竪穴住居址等が検出され、いずれも丘陵の斜面に位置する。生産関係の遺跡では、今山の東側砂丘で布留式併行の製塩土器が出土しているが、炉などの遺構は検出されていない。中世では、今津地区の海岸線に沿って築造された元寇防塁が、数地区にわたって残されている中で最も良好な状態で遺存している。⁽⁸⁾元寇防塁の南500mの砂丘上では、土製の鼎・摺鉢などが採集されている。勝福寺西の砂丘では、1958年に土砂採集中、約200体の人骨とともに陶磁器などが出土し、そのうち陶磁器109点他が採集され、現在九州歴史資料館蔵。⁽⁹⁾人骨は頭部と体部が別々に埋葬され、体部だけが火葬されていたという。

注

- (1) 福岡市教育委員会『今山・今宿遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 1981
- (2) 福岡市歴史資料館『福岡平野の歴史—緊急発掘された遺跡と遺物 原始時代～江戸時代—』1977
- (3) (1) 文献
- (4) 福岡市教育委員会『今宿五郎江遺跡Ⅰ』(第1次)福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 1986
1985年 福岡市教育委員会調査
- (5) 福岡県教育委員会『今宿高田遺跡』『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集 1982
- (6) 1983年、福岡市教育委員会調査
- (7) 1985年(第1次)、1986年(第2、3次)福岡市教育委員会調査
- (8) 福岡市教育委員会『今津元寇防塁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第4集 1969
- (9) 亀井明德「博多の中国陶磁地図」初出1975～6『日本貿易陶磁史の研究』



第2図 青木遺跡群全体図 (1/8000)



第3図 発掘調査範囲と周辺地形図(1/500)

Ⅲ 調査の記録

1 調査の概要と経過

青木遺跡の発掘調査は、建設工事に追われて進行した。工事の工程に則り擁壁部分にあたる東西北辺各3m幅、水路部分等にあたる南前面域6m幅の区域は先行して発掘調査を開始し、終了後ただちに工事に着工したが、遺構のつながりとは関係なく調査区を分割したことで遺構の検出には、多少なりとも困難を伴い、工事側に引き渡したものの未調査区域にまで掘削が及ぶところもみられ、SK36土壌のようにその東辺が内側の庁舎部分での発掘調査の際、すでに失われていた例もあった。庁舎部分の調査は、5月16日から開始し、5月30日に終了した。

2 検出遺構

掘立柱建物（第4図）

多数の柱穴を検出したが、その内、建物として18棟まとめることができた。弥生時代と中世の2時期に大別できる。中世の掘立柱建物の主軸の方向は、N5°W前後、N10°W前後、N50°W前後が大半を占め、同一の方向をとる建物で重複するものがみられる。掘立柱建物群の時期の構成、建物に付随する土壌、溝等の遺構との関係は、柱穴掘方出土の限られた資料からは明らかにできなかった。またまとめることができない柱穴も数多くみられる。方形の建物の側柱により建物の検討を行なったが、間仕切りの柱、柵列、L字形、T字形建物等の存在も推測することができよう。

以下、個別の建物について述べる。

SB01～03は調査中央の西側で検出された柱筋を同じくして重複する関係にあり、建て替えの可能性が考えられる。先後関係は、柱穴の切り合いがみられないこと、柱穴掘方内出土遺物からは三棟の細かな時期比定ができないことから不明である。

SB01（第1図）

2×3間の東西棟で、長軸の方向をN78°Eにとる。梁間全長4.8m、桁行7cmを測る。柱穴は径40cm前後の円形、深さ30～40cmを測る。柱穴掘方からは土師器皿片が出土。

SB02（第1図）

2×3間の東西棟で長軸の方向をN79°Eにとる。梁間全長3.9m、桁行5.3mを測る。柱穴は径30cm前後の円形、深さ30～50cmを測る。柱穴掘方からは時期を比定し得る遺物は出土しなかった。

SB03（第1図）

2×3間の南北棟で、長軸の方向をN10°Wにとる。梁間全長4.7m、桁行全長6.9mを測る。

柱穴は径40cm前後の円形深さ10~50cmを測り、礎石をもつものがある。柱穴掘方からは土師器杯片が出土。

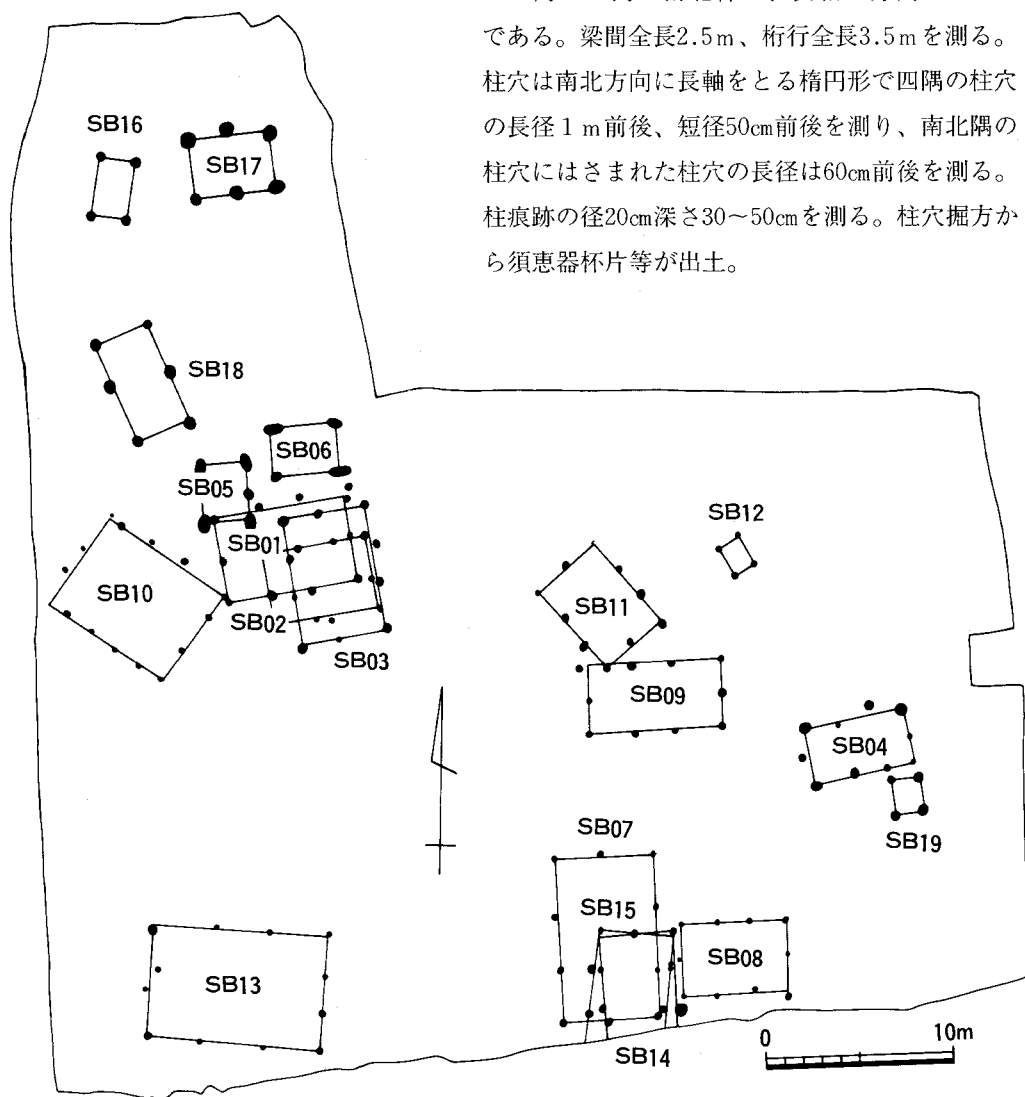
SB04 (第1図)

調査区中央東側で検出した。2×3間の東西棟で、長軸の方向はN76°Eである。梁間全長3.0m、桁行全長5.2mを測る。柱穴は径30~40cmの円形で深さ20~30cm、柱穴掘方から土師器○片が出土。

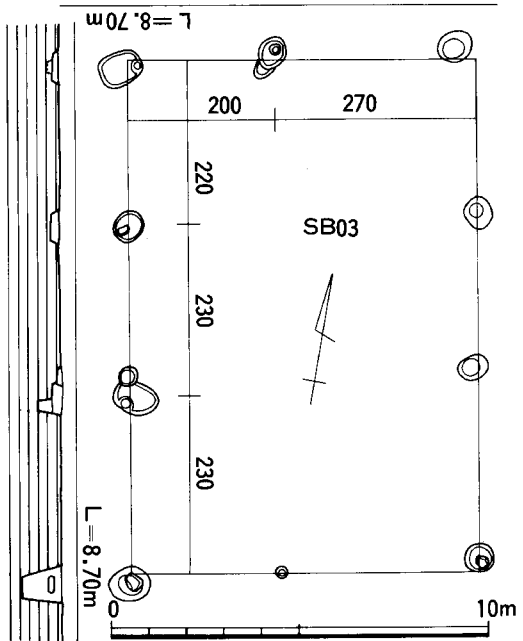
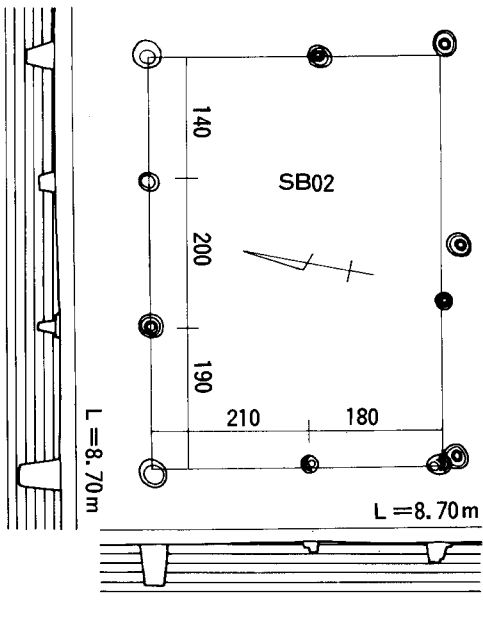
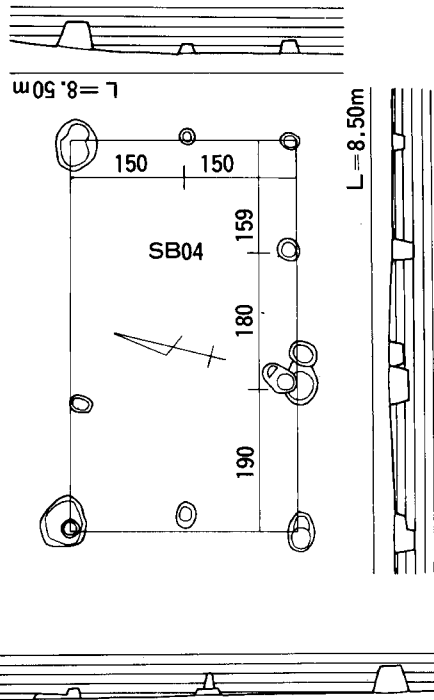
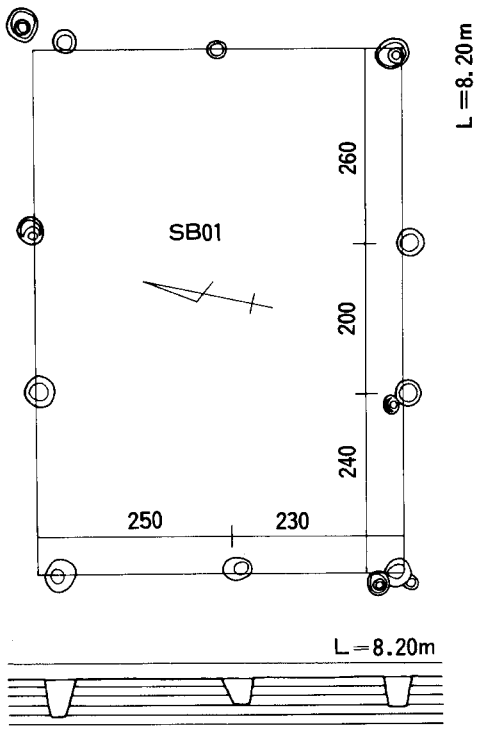
SB01~03の北側でSB05、06を検出した。

SB05 (第2図)

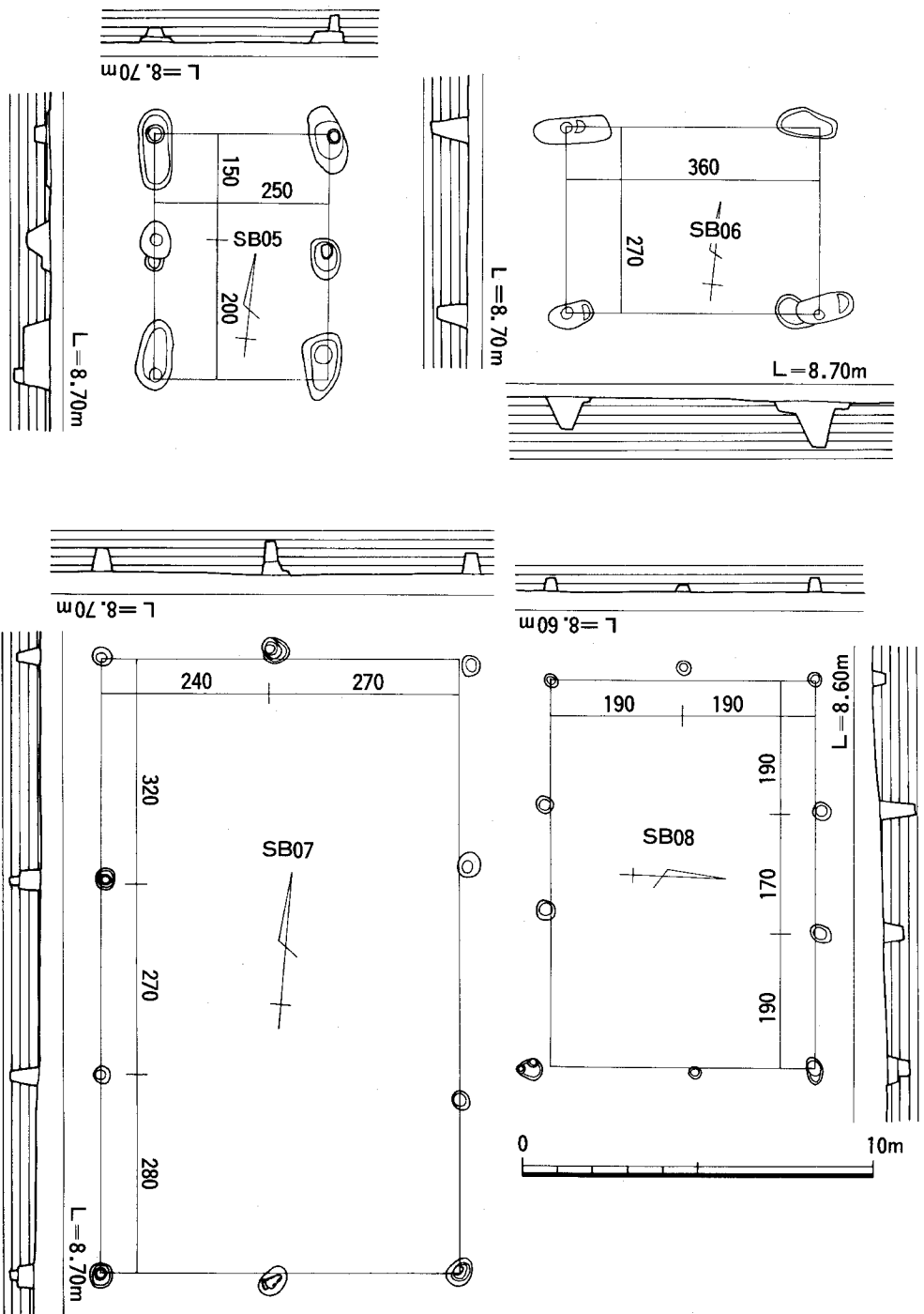
1間×2間の南北棟で、長軸の方向はN7°Wである。梁間全長2.5m、桁行全長3.5mを測る。柱穴は南北方向に長軸をとる楕円形で四隅の柱穴の長径1m前後、短径50cm前後を測り、南北隅の柱穴にはさまれた柱穴の長径は60cm前後を測る。柱痕跡の径20cm深さ30~50cmを測る。柱穴掘方から須恵器杯片等が出土。



第4図 掘立柱建物配置図(1/400)



第5图 掘立柱建物実測図(1)



第6图 掘立柱建物实测图(2)

SB06 (第2図)

1間×1間の東西棟で、長軸の方向はN83°Eである。梁間全長2.5m、桁行全長3.6mを測る。柱穴は東西方向に長軸をとる楕円形で長径70~110cm、短径40cm前後深さ40~70cmを測る。柱穴掘方からは時期を比定し得る遺物の出土をみななかったが、柱穴の形状、覆土の状況(灰褐色土)、主軸の方向が、SB05と同一であることから、SB05と同時期に比定できよう。

調査区中央の南端で、SB07、08を検出した。

SB07 (第2図)

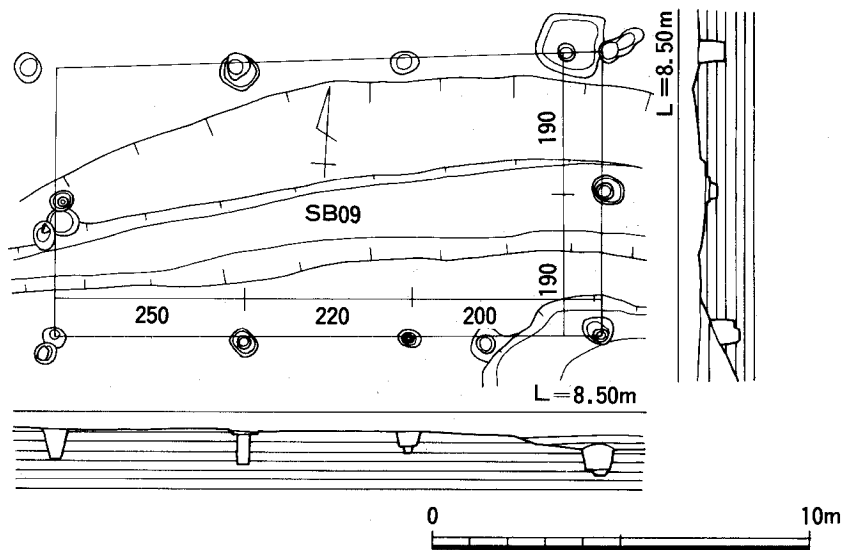
2間×3間の南北棟で、長軸の方向はN4°Wで、梁間全長5.1m、桁行全長8.7mを測る。柱穴は40cm前後の円形、深さ30~50cmを測り、礎石をもつものがある。柱穴掘方から土師器皿片が出土。

SB08 (第2図)

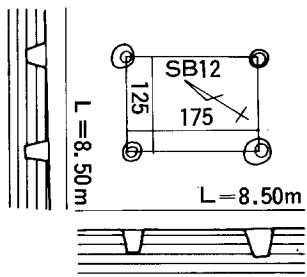
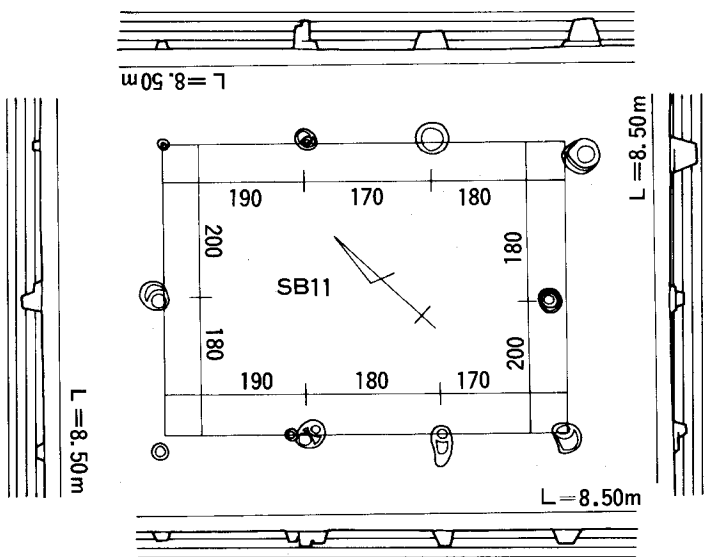
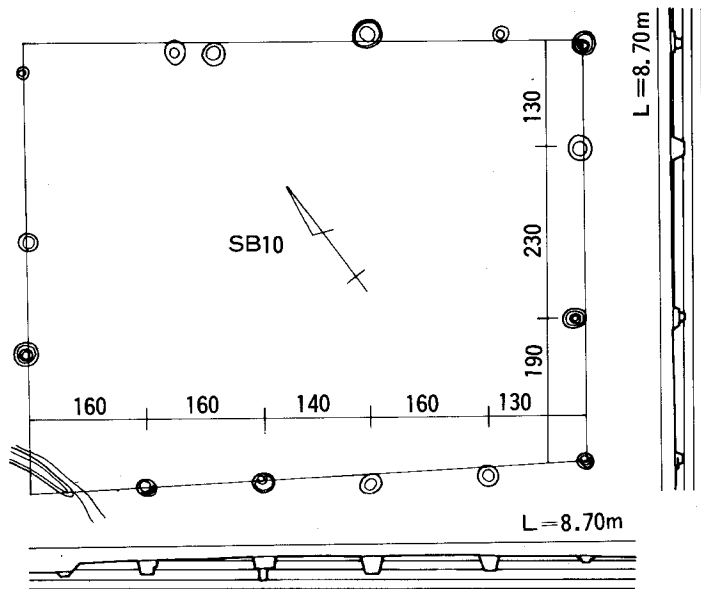
2間×3間の東西棟で長軸の方向はN86°Eである。梁間全長3.8m、桁行全長5.5mを測る。柱穴は20~30cmの円形、深さ30~50cmを測る。柱穴掘方からは時期を比定し得る遺物の出土をみななかったが、主軸の方向がSB07と同一であることでSB07と同時期に比定できよう。

SB09 (第3図)

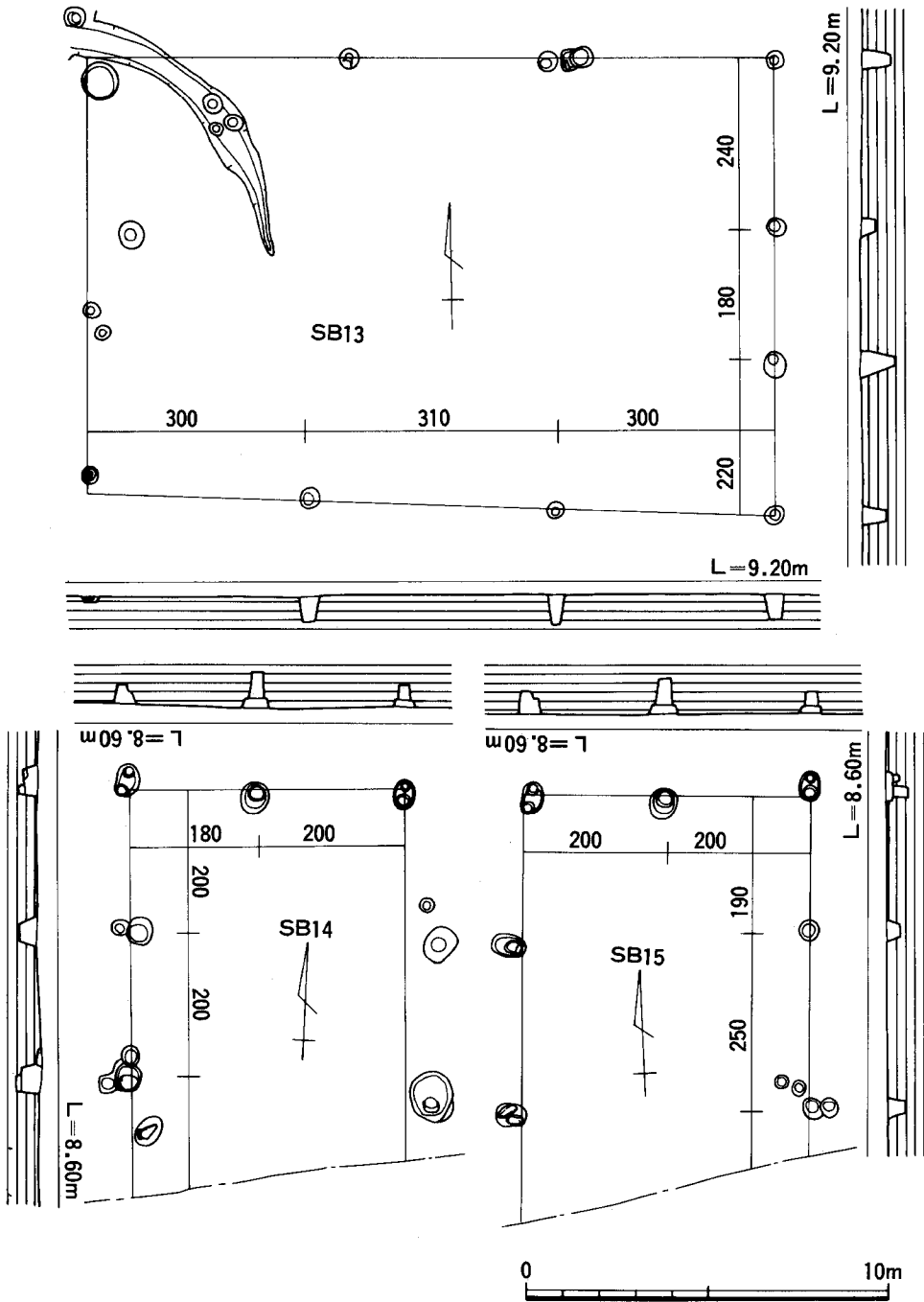
調査区中央で検出した。2間×3間の東西棟で長軸の方向は、N87°Eである。梁間全長3.8m、桁行全長6.7mを測る。柱穴は20~30cmの円形、深さ30~50cm。柱穴掘方から時期を比定し得る。遺物の出土をみななかったが、東北隅の柱穴が、土師器皿片が出土した柱穴を切っていること、



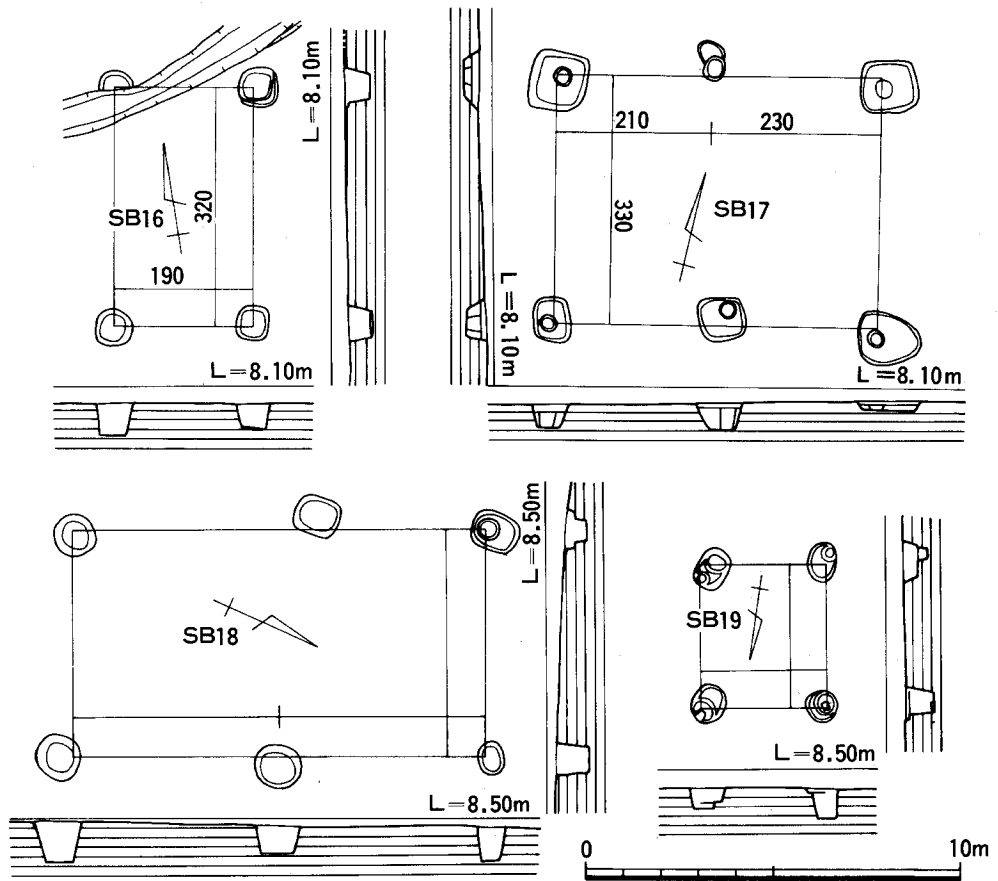
第7図 掘立柱建物実測図(3)



第8図 掘立柱建物実測図(4)



第9図 掘立柱建物実測図(5)



第10図 掘立柱建物実測図(6)

また主軸の方向がSB07・08と同一であることから、それらの建物と同時期に比定できよう。

SB10～13は主軸の方向をほぼ同じくする。

SB10 (第4図)

調査区西側中央で検出した3×5間の建物で、長軸の方向はN50°Wである。西南隅の柱穴は水路に切られている。梁間全長5.6m、桁行全長7.5mを測る。柱穴は30cm前後の円形、深さ20～30cmを測る。柱穴掘方からは時期を比定し得る遺物の出土をみななかったが、東北隅の柱穴が、土師器皿片が出土した柱穴を切っている。

SB11 (第4図)

調査区中央で検出した2×3間の建物で長軸の方向はN40°Wである。梁間全長3.8m、桁行全長5.4mを測る。柱穴は40cm前後の円形、深さ20～30cmを測る。柱穴掘方からは時期を比定し得る遺物の出土はない。

SB12 (第4図)

SB11の東側で検出した1×1間の建物で、長軸の方向はN32°Wである。梁間全長1.25m、桁行全長1.75mを測る。柱穴は30cm前後の円形、深さ30cmを測る。柱穴掘方から遺物の出土はない。

SB13 (第5図)

調査区の西南隅で検出した主軸をほぼ南北にとる3×3間の東西棟である。梁間全長6.4m、桁行全長9.1mを測る。柱穴は30cm前後の円形。深さ20~40cmを測る。柱穴掘方から遺物の出土はない。

SB14 (第5図)

SB08の東側で検出した梁間2間の長軸をほぼ南北にとる建物で、南側は調査区外へ延びると考えられる。梁間全長3.8mを測り、桁行長5.5m分を検出。柱穴は40cm前後の円形。深さ20~40cmを測る。

SB15 (第5図)

SB14と重複し、長軸は7°ほど西へ傾く。北辺の柱穴はSB14と切り合い関係にあり、建替えの可能性が考えられるが先後関係は不明。梁間2間の建物で南側は調査区外へ延びると考えられる。梁間全長4.0mを測り、桁行長5.5m分を検出。柱穴は40cm前後の円形。深さ20~40cmを測る。柱穴掘方から土師器皿片が出土。

調査区の西北でSB16~18を検出した。

SB16 (第6図)

1×1間の南北棟で、長軸の方向をN9°Wにとる。梁間全長1.9m、桁行全長3.2mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し、径40cm前後、深さ40cm前後を測る。西北隅の柱穴掘方から弥生式土器(中期中頃)細片が出土。

SB17 (第6図)

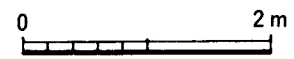
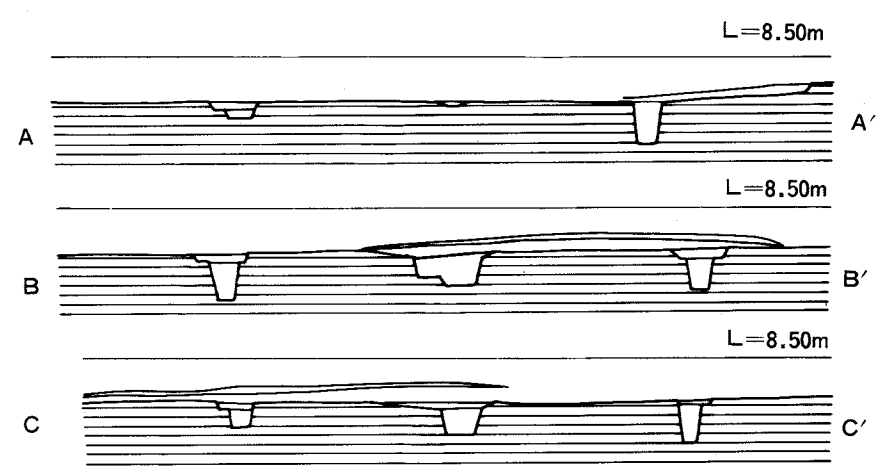
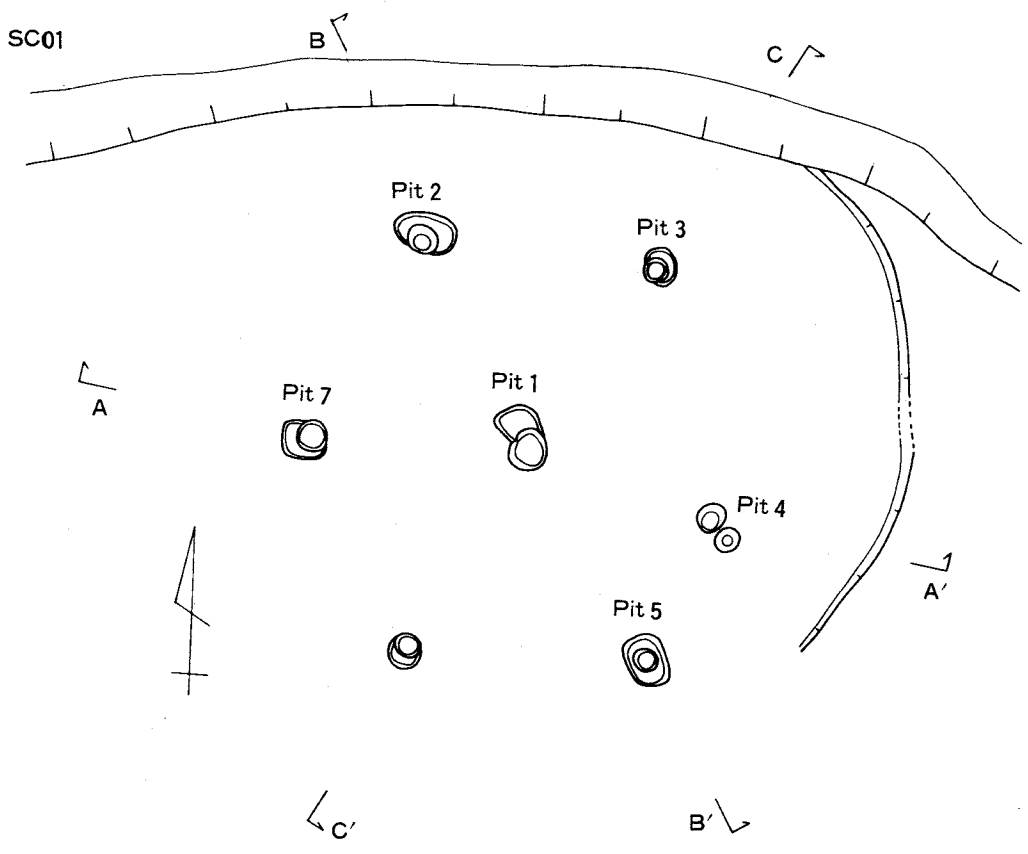
1×2間の東西棟で、長軸の方向をN77°Eにとる。梁間全長3.3m、桁行全長4.4mを測る。柱穴は隅丸方形を呈し、径60~70cm、深さ20~30cm、柱痕跡の径20cmを測る。柱穴掘方から弥生土器(中期)細片が出土。

SB18 (第6図)

1×2間の南北棟で、長軸の方向をN24°Wにとる。梁間全長3.0m、桁行全長5.5mを測る。柱穴は、円形ないし隅丸方形を呈し、径60cm前後、深さ40~50cmを測る。柱穴掘方から弥生土器細片(中期初頭)が出土。

SB19 (第6図)

調査区の東南で検出した1×1間の南北棟で長軸の方向をN9°Wにとる。梁間全長17m、桁行全長1.9mを測る。柱穴は円形を呈し、径40cm、深さ30~40cmで、掘方から弥生土器細片出土。

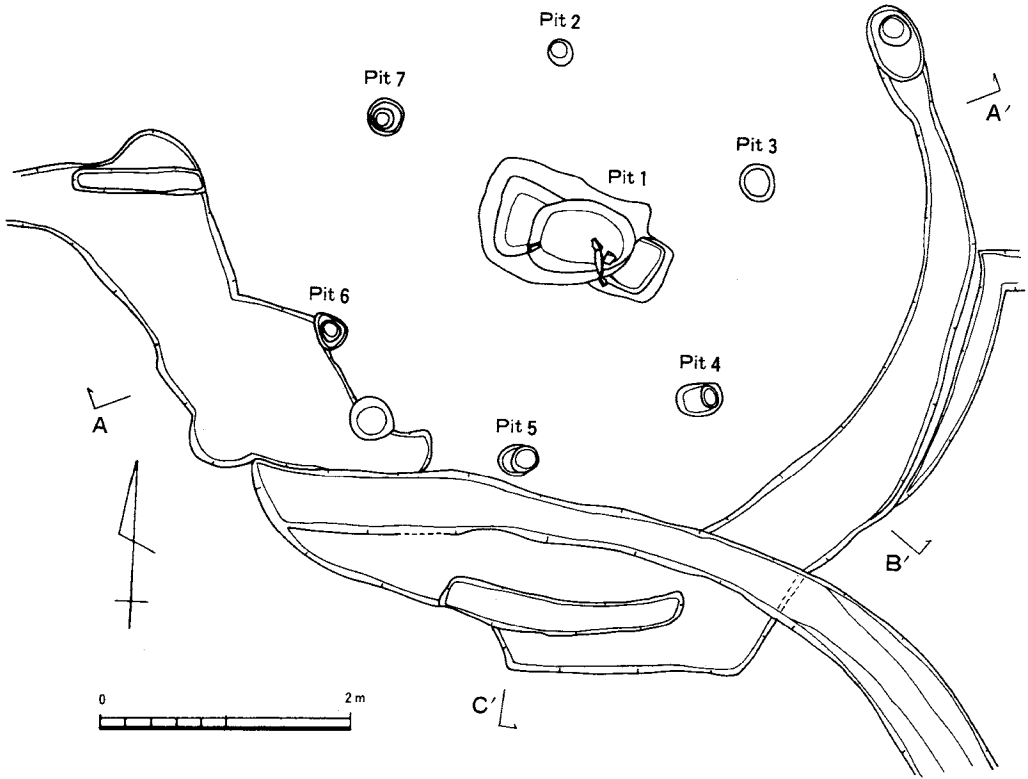


第11図 豎穴住居実測図(1) (1/60)

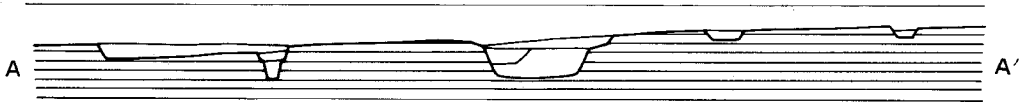
SC 02

c

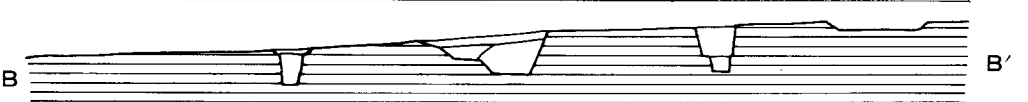
B



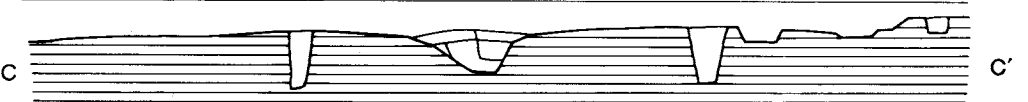
L=8.50m



L=8.50m



L=8.50m



第12図 豎穴住居跡実測図(2) 1/60

竪穴住居 (第11・12図)

SC01 壁は後世の削平によってほとんど失なわれており、東側にわずかに残る。平面形は復元径6m前後の円形を呈するとみられる。残存する壁の高さは約 cmを測る。

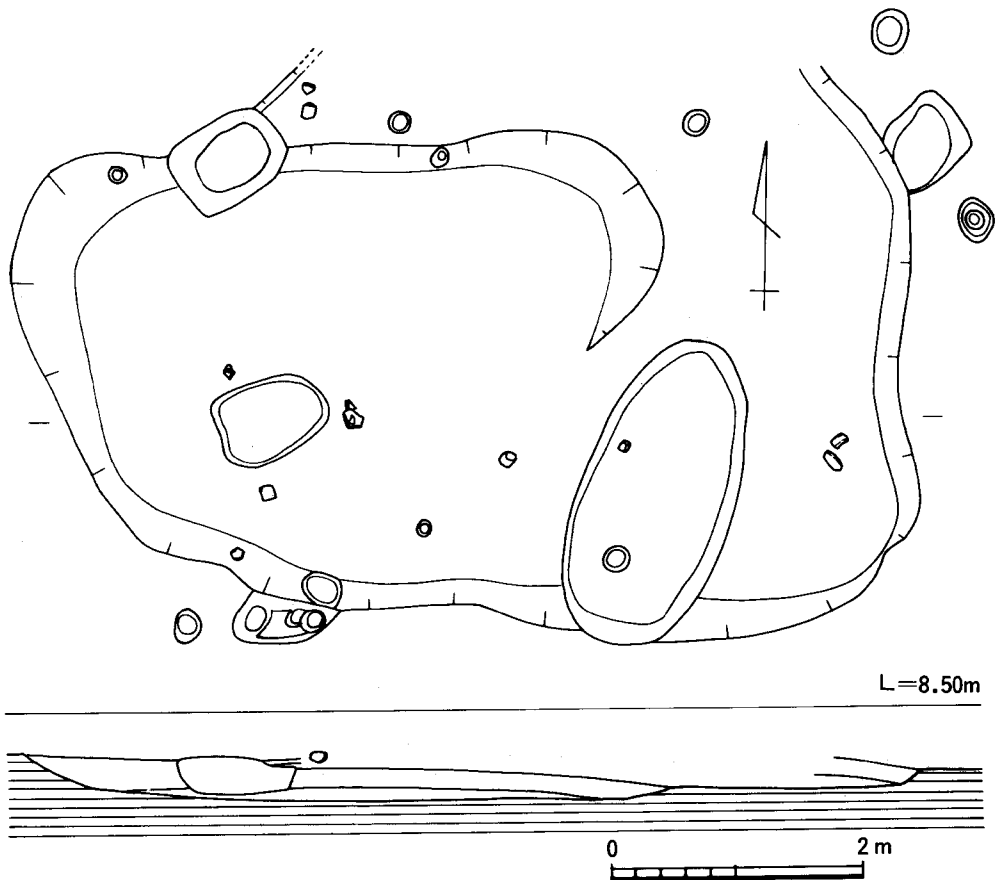
柱穴は中央の Pit 1 の他に、6角形に並ぶ Pit 2～7が本住居跡に伴うものと考えられる。柱穴の径20cm前後、深さ20～30cmを測る。柱間柱の路離は次頁の表に示す通りである。

中央部の不整形の柱穴は炉跡の可能性が考えられるが、焼土および炭化物はみられなかった。床面、柱穴から時期を決定するための遺物の出土はない。

SC02 壁は後世の削平によって失なわれているが、南側に壁溝が残っており、平面形は復元径6.8m前後の円形を呈するとみられる。

柱穴は中央の Pit 1 の他に、6角形に並ぶ Pit 2～7が本住居跡に伴うものと考えられる。柱穴の径20cm前後、深さ20～30cmを測る。柱穴間の距離は下表に示す通りである。

SK10



第13図 土壕実測図(1) (1/60)

壁溝は周囲に完存していなかったが、幅30～110cm、残存する深さ10～20cmを測る。
 中央部の不整形の柱穴は炉跡の可能性が考えられるが、焼土および炭化物はみられなかった。
 Pit から弥生時代中期中頃の特長を示す逆L字状口縁の甕口縁部細片が出土。

柱 穴 間 の 距 離 計 測 表

(単位cm)

SC01	壁までの距離	Pit1からの距離		柱間の距離	SC02	壁までの距離	Pit1からの距離		柱間の距離
Pit2	—	180	Pit 2～3	190	Pit2	—	160	Pit 2～3	190
Pit3	—	180	Pit 3～4	200	Pit3	160	170	Pit 3～4	180
Pit4	120	170	Pit 4～5	130	Pit4	160	180	Pit 4～5	150
Pit5	—	200	Pit 5～6	190	Pit5	140	170	Pit 5～6	180
Pit6	—	180	Pit 6～7	190	Pit6	140	190	Pit 6～7	170
Pit7	—	170	Pit 7～2	180	Pit7	—	170	Pit 7～2	150

土 壌

SK10 (第13図)

平面形は東西長7.2m、南北長4.5mの不整形、断面形は深さ25cmの船底形を呈し、立ち上がりは緩やかである。後世の土壌SK26、ピットが掘り込む。甕底部、高杯脚部、石斧未製品出土。

SK24 (第14図)

調査区中央付近に位置する。北側はSD23に切られるが、長軸を南北にとる楕円形に復元できよう。東西長90cm、南北長110cm、残存する深さ5cmを測る。土師器皿片が出土している。

SK24の周囲には、主軸を同じくする溝が、L字状にめぐっている。土師器皿が出土しており時期を同じくする。SK24に伴うと考えられる。溝の東、南側はSD22、23に切られているが、SK24の周溝として機能していた可能性が考えられる。溝は、幅30～50cm、深さ2～10cmを測る。西南隅の柱穴も、SK24に伴うものと考えられる。

SK02 (第15図)

調査区東端の中央よりやや北に位置する。平面形は長方形を呈し、主軸をN75°Eにとる。東側は調査区外へ延び、南北長60cmを測り、東西長は118cm分検出、断面形は逆台形を呈し、残存する深さ50cmを測る。

SK36 (第15図)

SK01の西北に位置する。東辺は擁護壁工事の際に掘削されていた。擁護壁部分の調査では、これに続く遺構は検出されなかったことから、東西径は cm以内と考えられる。平面形は隅丸方形を呈し、主軸をN11°Wにとる。南北長167cm残存する東西長100cmを測る。断面形は船底形を呈し、残存する深さ32cmを測る。底面より完形の土師器杯が出土。土壌墓と考えられる。

SK26 (第15図)

SC03を切る。平面形は長径254cm、短径120cmの長楕円形を呈し、長軸をN18°Eにとる。断面形は浅い船底形を呈し、残存する深さ20cmを測る。

SK31 (第16図)

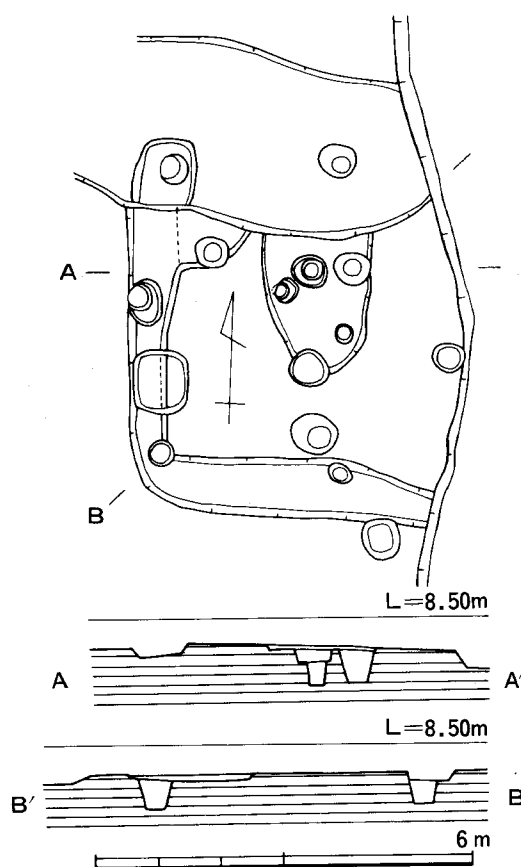
調査区西北に位置し、北側は水路に切られている。平面形は不整形を呈し、長軸をほぼ南北にとる。東西長145cm、残存する南北長155cmを測る。断面形は浅い船底形を呈し、残存する深さ22cmを測る。

SK20 (第16図)

SK21の北側に位置し、南半は溝に切られている。平面形は、径110cm前後の不整形円形。断面形は、すり鉢状を呈し、残存する深さ25cmを測る。

SK22 (第16図)

SK23の両側に位置する。平面形は径2m前後の不整形円形を呈し、残存する深さ15cmを測る。ほぼ中央と壁際に柱穴を有し、両柱穴を結ぶ1条の溝がある。溝の幅は20cm深さ4cmを測る。



第14図 土壌実測図(2) (1/60)

遺物の出土はないが、覆土が暗黒褐色土で弥生時代の貯蔵穴の底部と考えられる。

SK15 (第16図)

調査区のはほぼ中央で検出された。平面形は円形を呈し、上端径114cm、下端径90cmを測る。深さ158cmを測り、覆土は灰緑色粘質土である。井戸の可能性はある。遺物の出土はない。

SK01 (第17図)

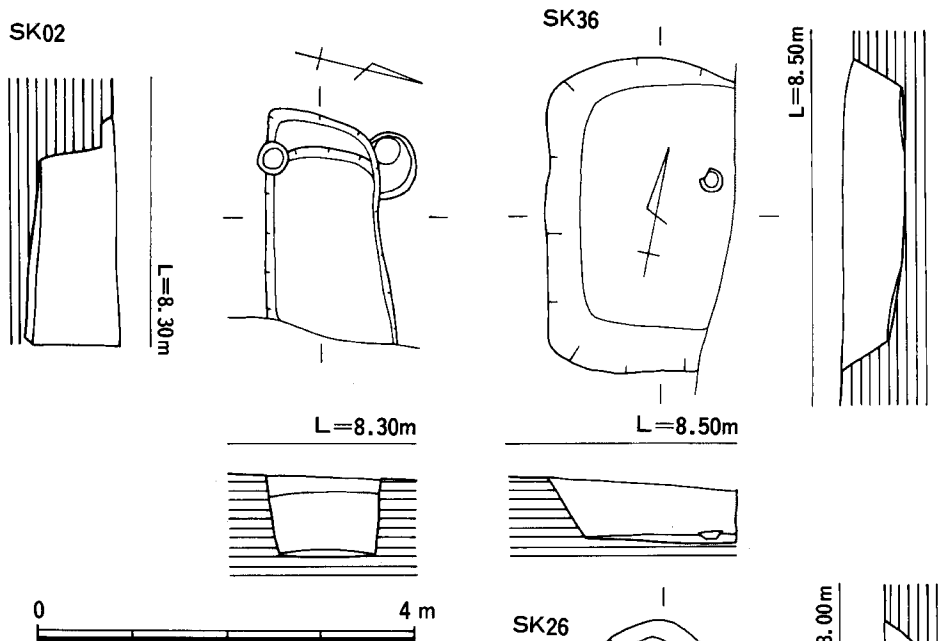
調査区東南隅に位置する。平面形は方形を呈し、主軸をほぼ東西にとる。東側は調査区外へ延び、南北長133cmを測り、東西長は145cm分検出。断面形は浅い船底形を呈し、残存する深さは21cmを測る。瓦片が出土。

SK14 (第17図)

SC02の西側に位置する長径100cm、短径75cmの楕円形を呈し、残存する深さ15cmを測る。

SK21 (第17図)

調査区東北に位置する。平面形は長径136cm、短径81cmの楕円形を呈し、長軸をN3°30'Wにとる。断面形は皿状を呈し、残存する深さは9cm



第15図 土壌実測図(3) (1/40)

を測る。

SK23 (第17図)

調査区の東側中央に位置し、遺構の東南側は削平されている。

SK29 (第17図)

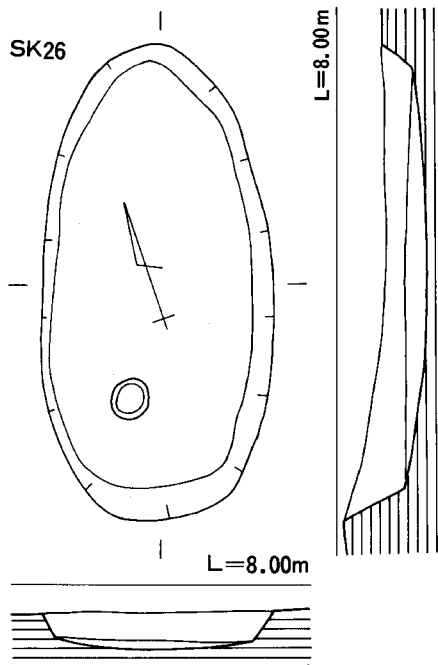
調査区の中央のやや南東よりに位置する。平面形は、長径210cm、短径130cmの長方形を呈し、長軸をN19°Wにとる。底面は平坦で、残存する深さ12cmを測る。

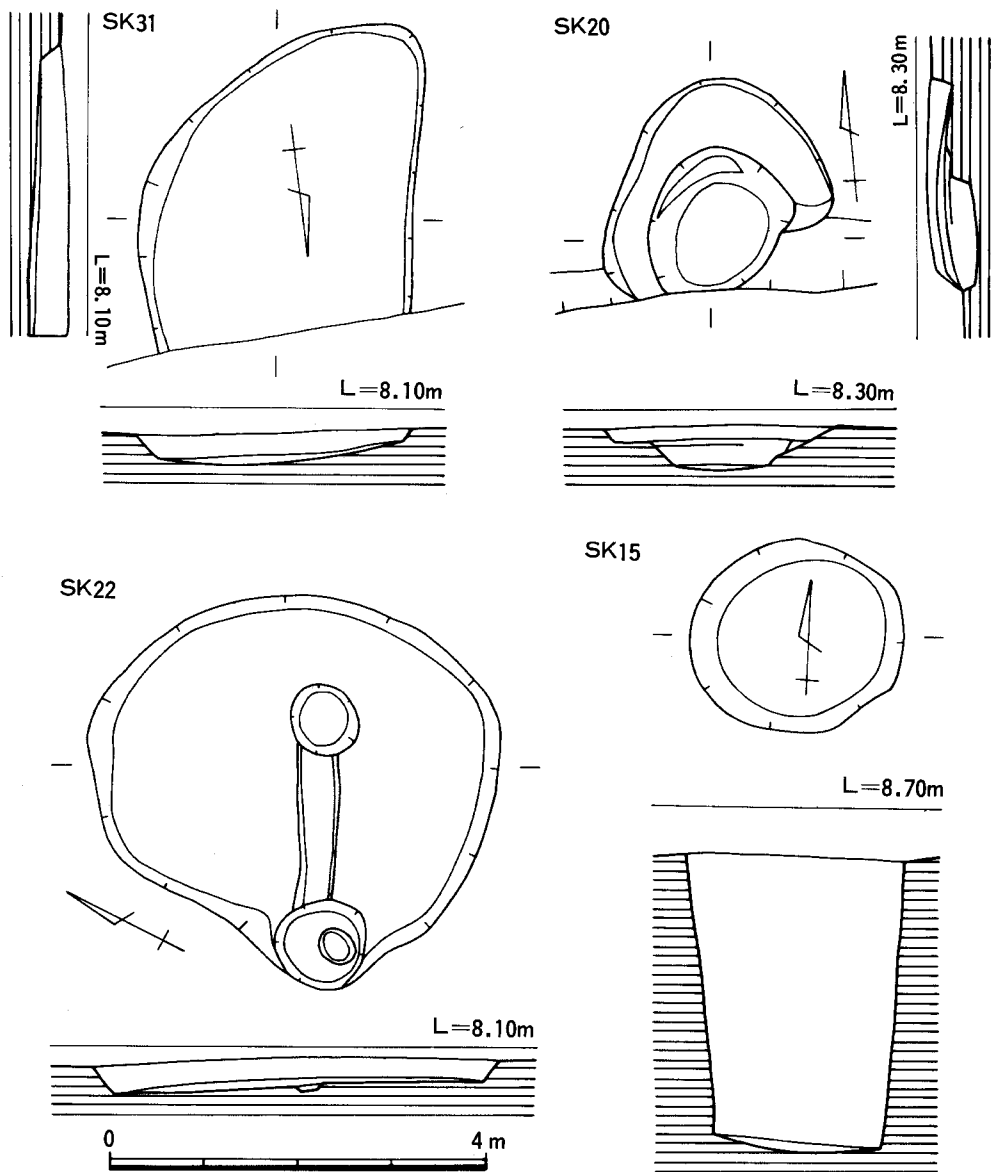
SK25 (第17図)

調査区の中央のやや南東よりに位置する。平面形は、径160cmの正方形を呈し、主軸をほぼ南北にとる。床面は平坦で残存する深さ25cmを測る。

SK30 (第18図)

調査区を南側中央に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長径4.7m、短径2.4mを測る。



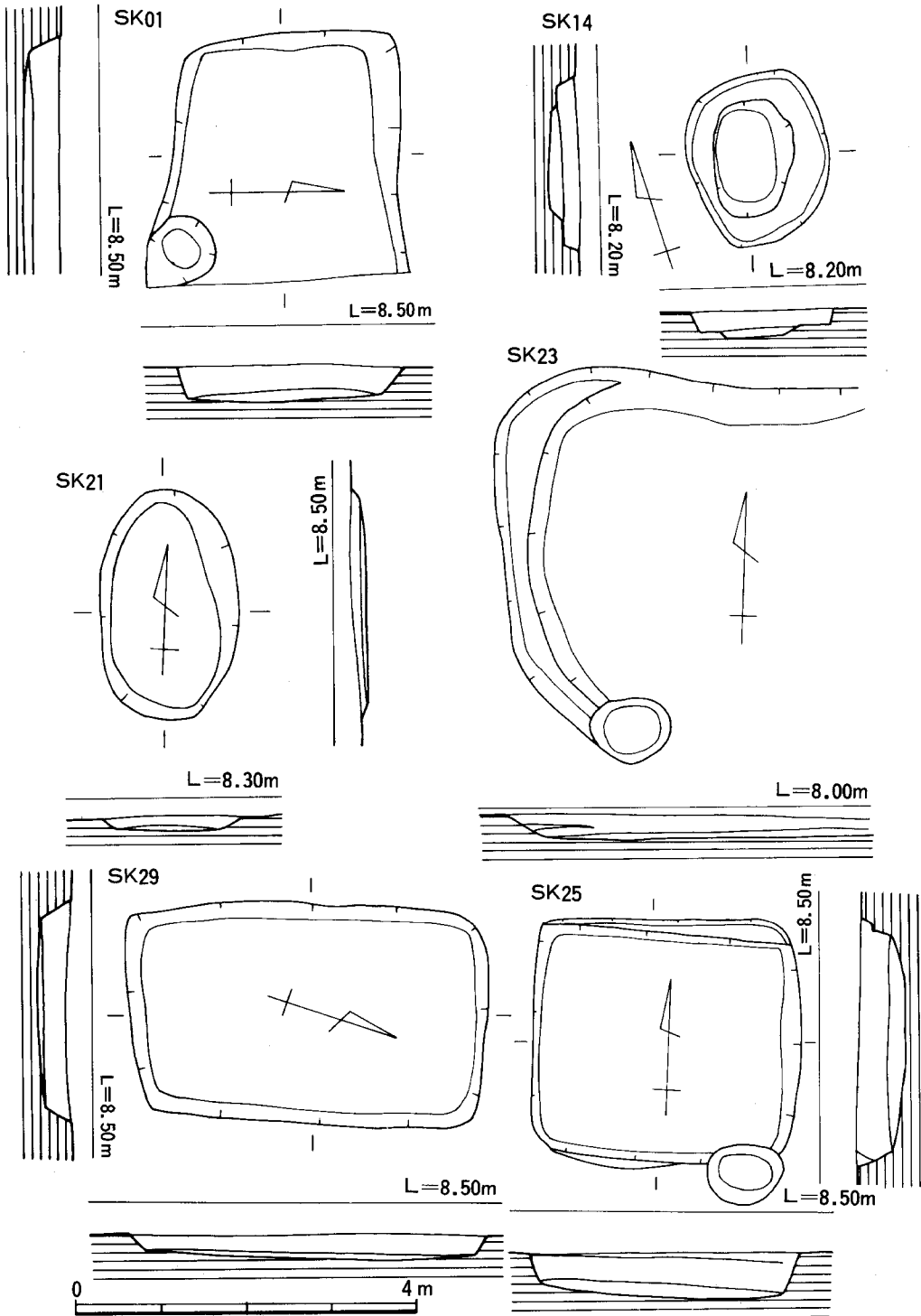


第16図 土壌実測図(4) (1/40)

断面形は船底形を呈し、深さ50cmを測る。瓦質摺鉢片、白磁碗片等が出土。

SK16 (第18図)

SK25・29の東側に位置する。平面形は、径3mの不整形円形を呈する。断面形は摺鉢状を呈し、深さ60cmを測る。底面から浮いた状態で人頭大の礫が出土した。石組の井戸から石組を取り払った底部の可能性が考えられる。遺物の出土はない。

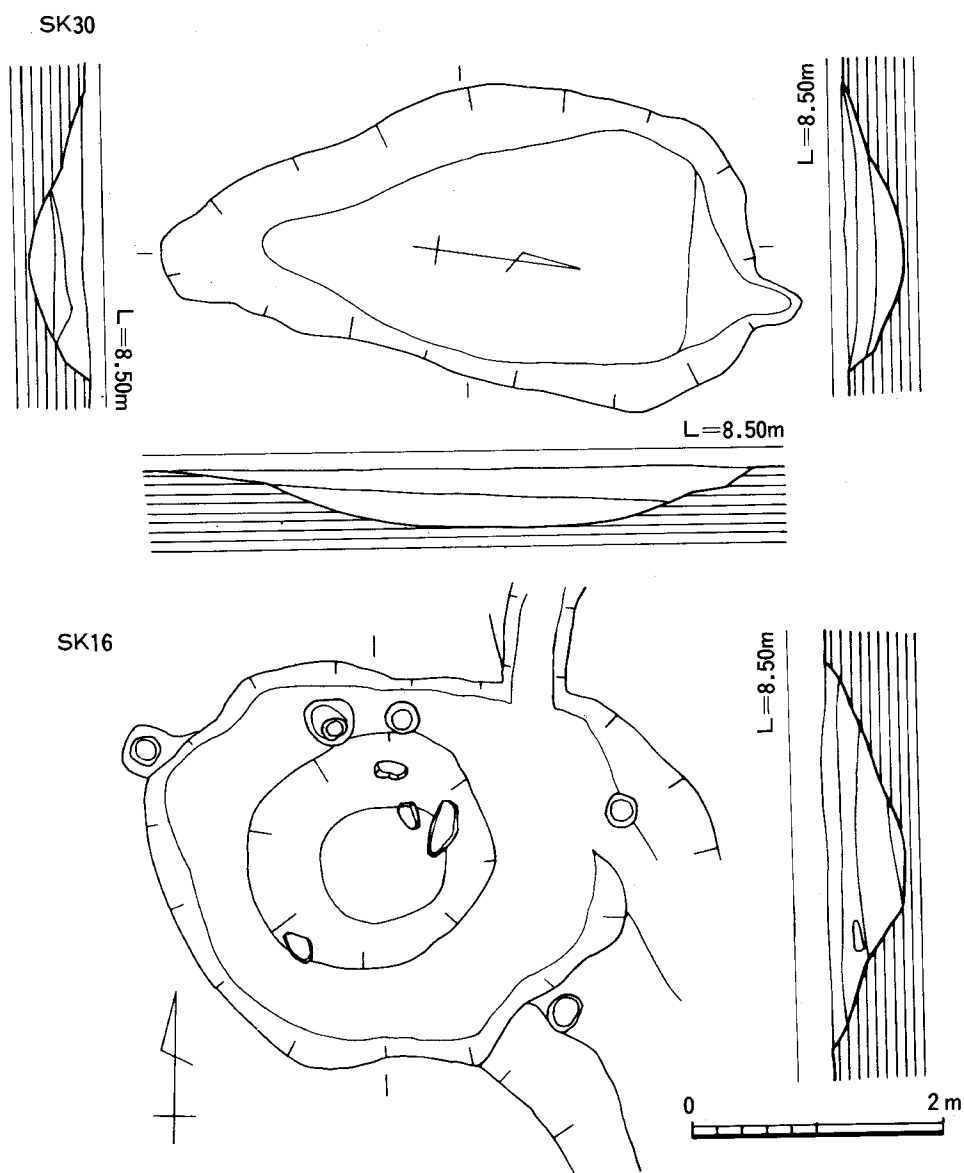


甕棺墓

SK05 (第19図)

調査区の西北、SC02の西側に位置する。墓壙の平面形は楕円形を呈し、長径56cm、短径32cm

第17図 土壙実測図(5) (1/40)



第18図 土壌実測図(6) (1/60)

を測る。断面形は摺鉢状を呈し、深さ45cmを測る。甕棺は主軸をN82°Eにとり、40°の傾斜をもって埋置される鉢形土器を上甕・甕形土器の下甕とする呑口の小児棺である。上甕と下甕の接合部には粘土帯が、めぐらされている。

溝 (付図参照)

SD31・32は調査区北側で検出した。幅60cm、深さ50cmを測る弧状にめぐる溝である。延長12m

分を検出。北側と西側は調査区外へ延びる。SD32は幅40cm、深さ20cmを測る。延長6 m分検出。

SD12は南端を現況の水路に切られる。幅40cm、深さ10cmを測る。延長2 m分検出。

SD33はSC02を切る。幅40cm、深さ50cmを測る弧状にめぐり溝である。延長9 m分検出。

SD36はSD26に切られる。幅30cm、深さ10cmを測る。延長5 m分検出。

SD37はSD26を切る。幅30cm、深さ5 cmを測る南北に走る溝である。主軸の方位をN7°Wにとり、覆土は灰色で、東側で検出されたSB05・06と同一であることから、SD36かSB05・06に伴う可能性が考えられる。

SD20は調査区東側中央で検出した。幅2 m、深さ30cm、延長12mを測る東西に走る溝である。弥生土器（中期）底部細片等が出土。

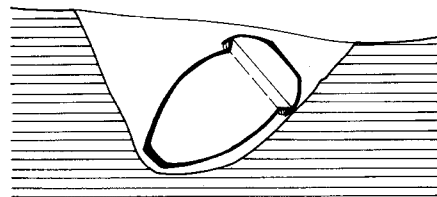
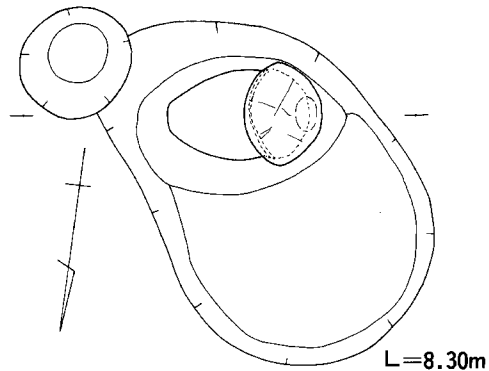
SD26は調査区西側中央で検出した。幅70cm、深さ5 cmを測る弧状にめぐり溝で西側は調査区外へのびる。延長19m分検出。SD33と一連の溝と考えられる。

SD29・30・35・34・38は調査区の西南隅で検出した。SD29・30・35は弧状にめぐり。SD29・35は幅30cm、深さ10cm、SD30は幅50cm、深さ20cmを測る。SD29・30の北側は後世に掘削され、南西側で重複し、西側は調査区外へのびる。SD29は延長10m分、SD30は延長10m分検出。SD35の西側は調査区外へ延び、延長10m分検出。SD36は幅30～60cm、深さ5 cm、延長2.2mを測る。

SD38は、幅70cm、深さ5 cmを測るL字形の溝である。延長6 m分検出。

SD08は調査区の東北隅で検出した。幅120cm、深さ25cmを測る東西に走る溝である。延長1.8m分検出。

SK05



第19図 甕棺墓実測図 (1/20)

3 出土遺物

掘立柱建物、柱穴出土土器 (第20図) 1はSB05、2～7は括あきれなかった柱穴出土。

須恵器

杯 (1)

土師器

皿、2は口径8.9cm、器高1.7cm、底径6.2cmを測る。胎土には砂粒を少量含み、色調は淡赤褐色を呈する。3は口径8.9cm、器高1.6cm、底径6.7cmを測る。胎土には粗い砂粒を含み、色調は明赤褐色である。2・3は磨滅が著しいが、底部は糸切りで圧痕の有無は明らかでない。4は口径7.8cm、器高1.5cm、底径5.9cmを測る。体部は横ナデ、内底にはナデが見られる。底部は糸切りで簾状圧痕が見られる。胎土には砂粒を含み、色調は赤褐色を呈する。5は口縁部を欠失し、底径6.6cmを測る。内面に炭化物が付着する。体部は横ナデ、底部は糸切りで圧痕は見られない。胎土には細かい砂粒を含み、色調は淡赤褐色を呈する。6は口径(復元)8.5cm、器高2.1cm、底径(復元)5.4cmを測る。体部は横ナデ、内底にはナデが見られる。底部は糸切りであるが、磨滅により圧痕の有無は不明。

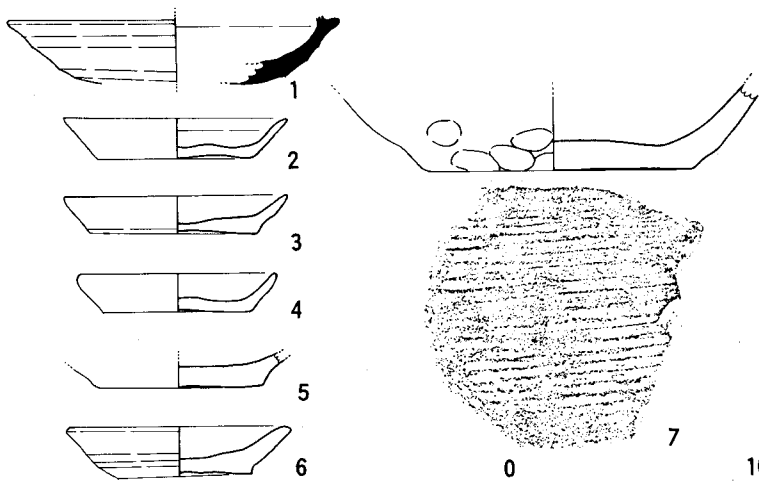
瓦質土器

片口鉢 7は底部資料である。磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、体部内面は刷毛目、内底にはナデが見られる。外面の立ち上り付近には指頭圧痕、底部には板状圧痕が見られる。

土壙出土土器 (第21・22図) 8・9はSK10、10～14はSK01、15はSK出土。

弥生式土器

高杯 8は脚部資料である。裾部が大きくラップ状に開き、裾端部は丸くおさめられている。胎土



中の砂粒は少なく、明赤褐色を呈する。

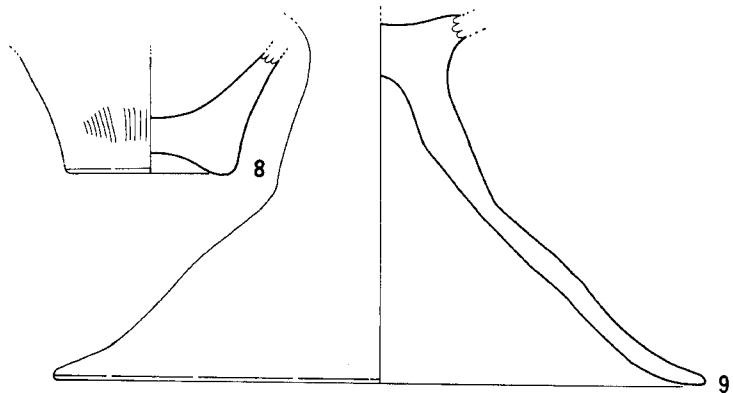
甕 9は1cm程の上げ底で厚さ1.5cmを測る。外面は刷毛目を施す。胎土には粗い砂粒を多量に含み、明赤褐色を呈する。

10～12は口縁端部外面に三角突帯を貼付した口縁部片、

13・14は上げ底の底

第20図 掘立柱建物、柱穴出土土器実測図(1/3)

部資料である。13は1.5cm程の上げ底で厚さ1.5cm、14は1cm程の上げ底で厚さ2cmを測る。いずれも胎土には粗い砂粒を多量に含み、明赤褐色を呈する。15は逆L字状口縁の破片資料で、胎土には粗い砂粒を多量に含み、



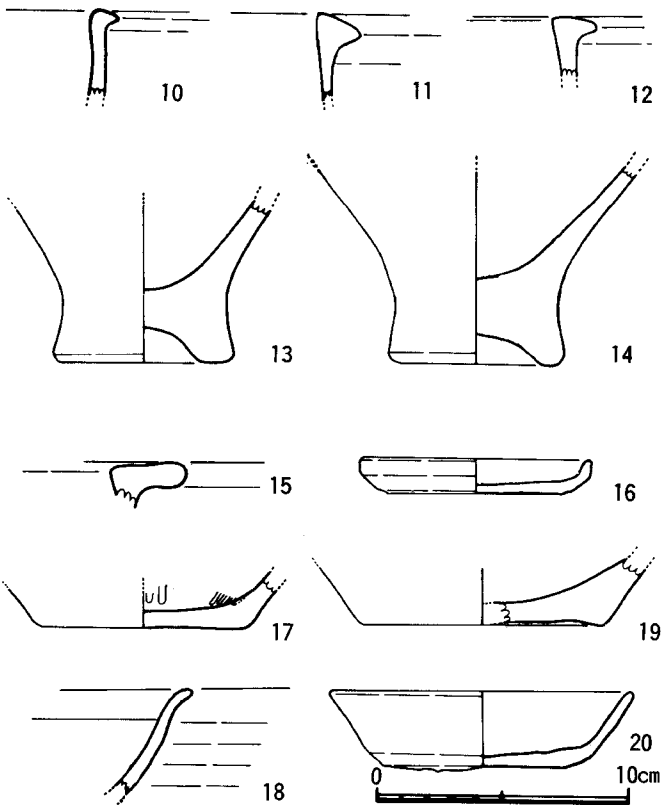
第21図 土壙SK10出土土器実測図(1/3)

暗赤褐色を呈する。19は甕あるいは壺の底部片で、胎土には粗い砂粒を多量に含み、その色調は暗赤褐色を呈する。外面には赤色顔料を塗布する。

土師器 16はSK24、20はSK36出土。

皿 16は口径9.0cm（復元）、器高1.4cm、底径7.0cm（復元）を測る。磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、底部は糸切りで圧痕の有無は不明。胎土には砂粒を少量含み、淡赤褐色を呈する。

杯 20は口径11.8cm、器高3.0cm、底径7.2cmを測る。体部は横ナデ、内底にはナデが見られる。底部は糸切りで板状圧痕が見られる。胎土には粗い砂粒を多量に含み淡赤褐色を呈する。



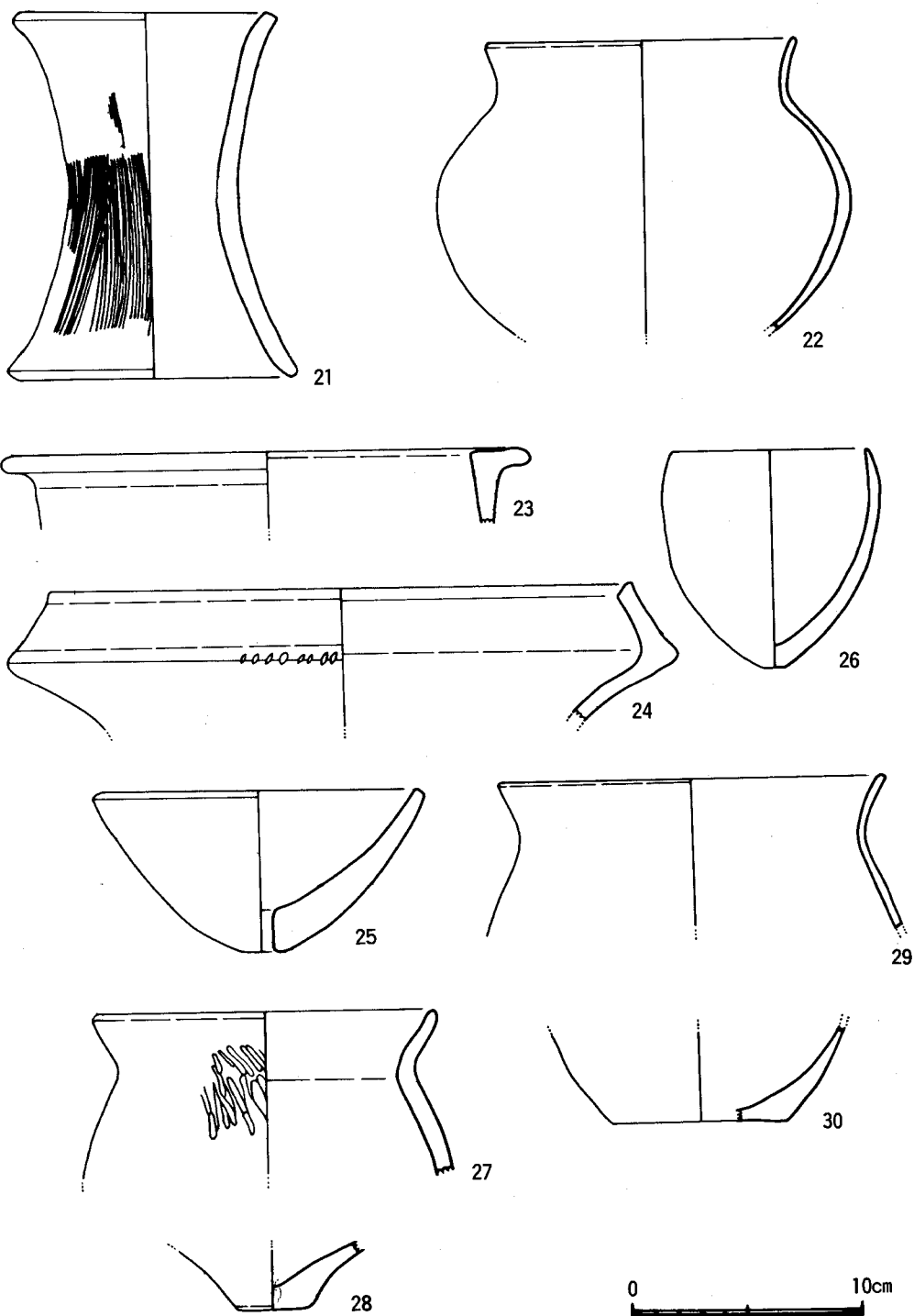
第22図 土壙出土土器実測図(1/3)

瓦質土器 SK30出土。

摺鉢 底部片で、内面には4本単位を条線を入れる。胎土には粗い砂粒を多量に含み、淡黄褐色を呈する。

白磁 SK30出土。

椀 外反する口縁部片。



第23图 沟出土土器实测图 (1/3)

溝出土土器（第23図）遺構ごとに述べる。

弥生式土器 いずれも胎土には粗い砂粒を多量に含み、磨滅が著しい。

SD08 21は上下に緩やかに開く筒状の器台である。外面は刷毛目、端部には横ナデを施し、内面は磨滅により不明。器受部径11.4cm、器高11.0cm、裾部径12.6cmを測る。色調は明赤褐色。

SD12 22は扁球状の胴部から口頸部が短く外反し、端部は薄くおさめる。色調は淡黄褐色を呈する。

SD26 23は逆L字状口縁の甕片で、色調は明赤褐色を呈する。

SD29 24は複合口縁壺の口縁部片である。口縁上半部は外反気味に内傾し、端部は直立する。屈曲部に刻目を施す。色調は明赤褐色を呈する。**25**は底部に孔を穿つ鉢片で、色調は淡黄褐色を呈する。

SD31 26は小さい不安定な底部から、内弯気味に伸び、口縁部を薄くおさめる壺である。色調は暗黄褐色を呈する。

SD32 (27・28) 27は甕口縁部片。色調は**27**が淡灰褐色、**28**が明赤褐色を呈する。

SD35 (29・30) 29は甕口縁部片。色調はいずれも明赤褐色を呈する。

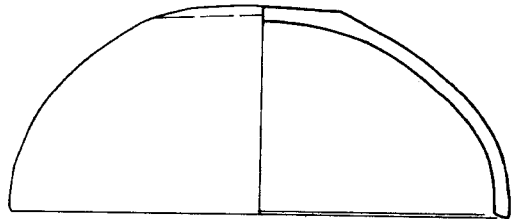
甕棺（第24図）

鉢（**31**）浅い半球形を呈し、底部はわずかに凸レンズ状で、胴部との境は不明瞭である。

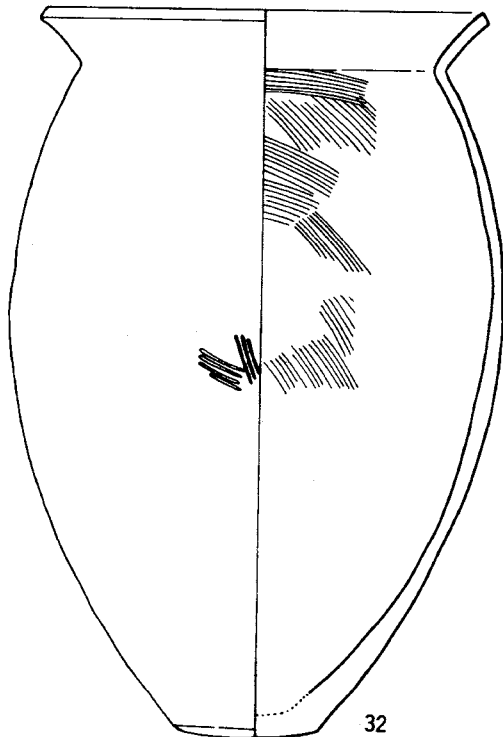
口径26.0cm、器高11.0cm、底径10.0cmを測る。胎土には粗い砂粒を多量に含み、淡赤褐色を呈する。

甕（**32**）口縁部はくの字状に外反し、胴部最大径は上位にある。底部は凸レンズ状を有し、胴部との境は明瞭である。口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は磨滅が著しいが叩きが残る。胴部内面は刷毛目を施す。

口径23.2cm、器高38.5cm、底径7.6cmを測る。胎土には粗い砂粒を多量に含み、暗赤褐色を呈する。



31



32



第24図 甕棺実測図(1/4)

石器・土製品 (第25～30図, 1～49)

本遺跡からは、表土層、包含層、各遺構から多数の石器とその素となる石材や製作過程で生じたと思われる剥片などが出土した。ここでは便宜上作図しうるもののみを抽出し、時代の古いと思われるものから順に簡単な説明をし一部に考察を加え最後に観察表を示した。

旧石器時代

1、2は赤褐色チャート素材とするもので、1はやや肉厚の二等辺三角形の剥片を利用した刃器でスクレーパーと思われる。2は小さな円礫を利用した一面利用両設打面を持つ石核で、小さな縦長剥片を剥出している。二者ともに二次堆積の所産である。時期は特定しえない。

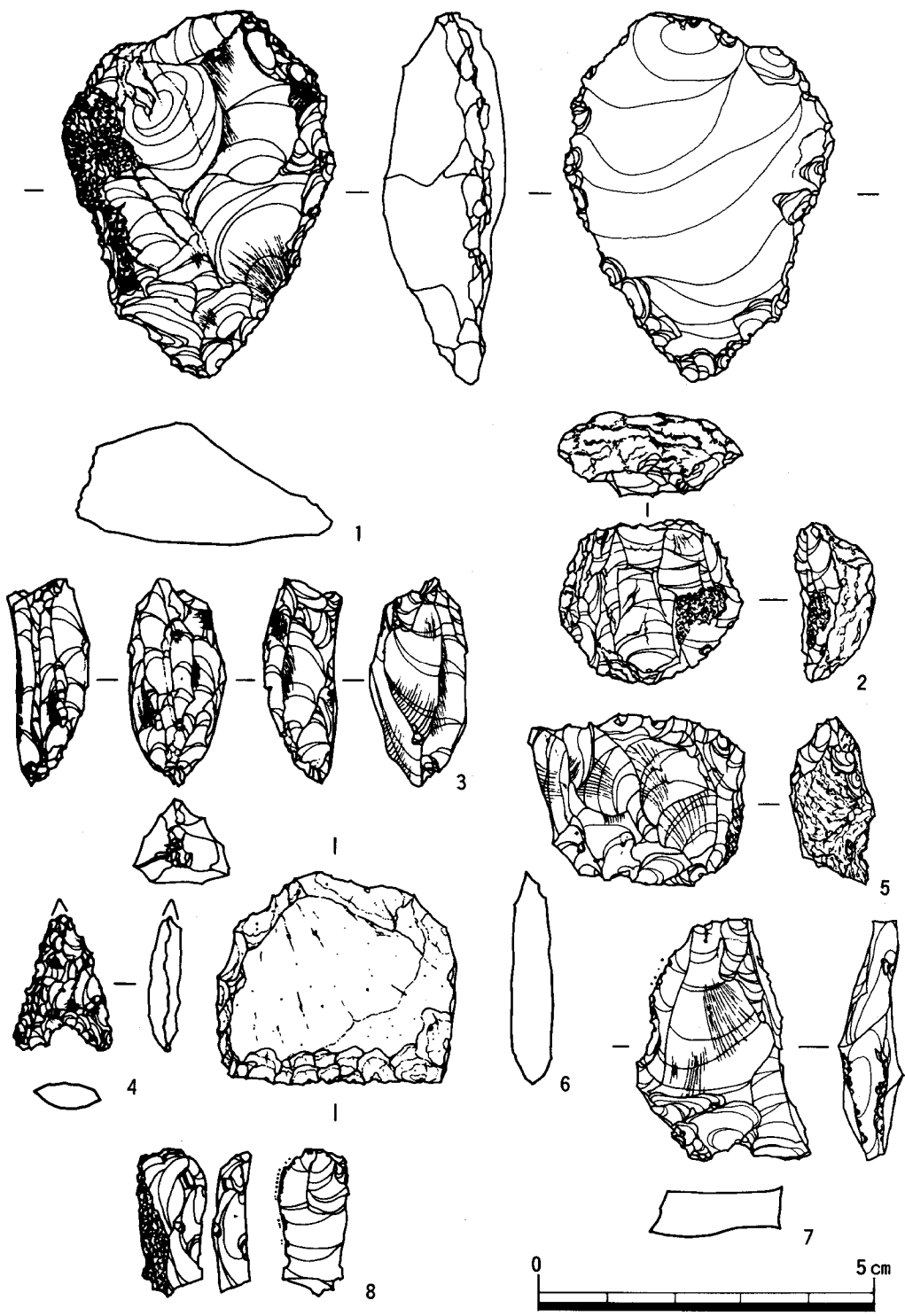
縄文時代

3は紡錘形を呈す楔形石器で、両極端に微細な剥離を有す。上面は欠損している。4は二等辺三角形で浅い袂が入る石鏃で先端を欠く。5は一面利用の上下両設打面を持つ石核である。7と8はエッジに使用によると思われる微細な連続する剥離を有す剥片である。これらは黒曜石を素材とする。6は横長剥片の縁辺部に二次的な加工をし刃器(サイドスクレーパーか)としたもの。安山岩製。18は超角礫の長辺の両縁辺部から裏表両面に剥離を施している石核であるが、いまだ表皮を除去している段階と思われる目的的な剥片を創出するには至っていない。後期から弥生前期にかけて存在する不安形な安山岩製剥片利用の刃器を剥出したものと考えられる。

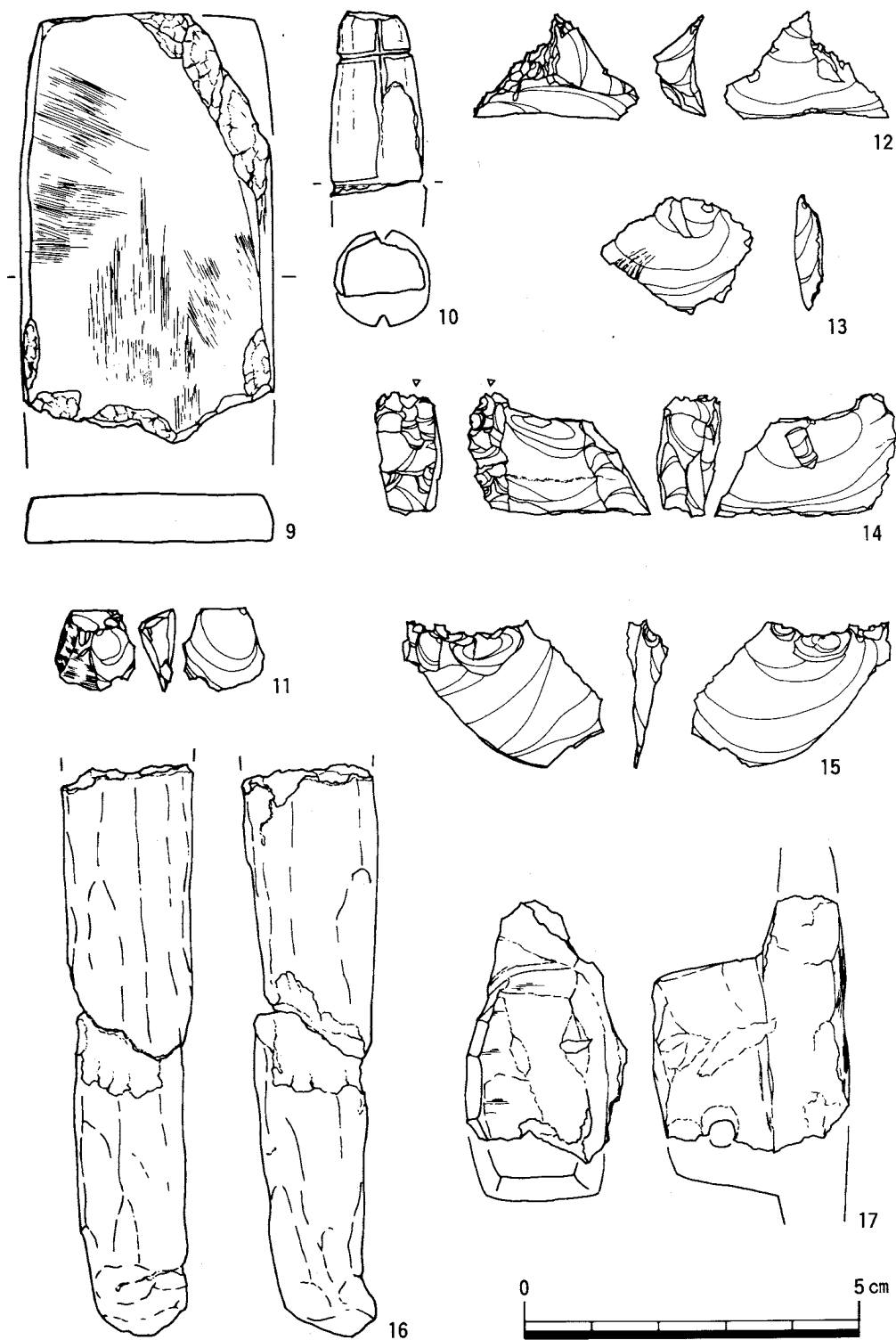
他は後期から晩期を前後するものと考えたい。

弥生時代

9は扁平磨製石斧である。刃部を欠いている。図示しえなかったが別個体のものがもう1点出土している。10は小型の有溝石錘である。19と20は滑石片岩を用いた有孔石錘である。両者ともにドーナツ状を呈し中心に滑らかな円孔を穿つものであるが、20には上面から側面に貫ける方形の副孔がある。内部に工具痕が明瞭で一辺が1.3cmほどのノミ状のものであると思われる。博多湾沿の遺跡からの類例が増えつつあるが、他地域からの例をあまり聞かない。11、12、13、14、15は碧玉製の剥片と加工欠損品である。14は肉厚の剥片の側辺を微細に剥離調整しており、11は荒砥ぎに至って欠損している。集落内で玉類の加工生産がおこなわれていた可能性を強く示す。21から44までは石斧の未成品とその製作工具であると思われる敲打具である。21から26はSC02に隣接するSK14から出土した一括資料である。図示していないがこの他に風化した玄武岩のフレークとチップ類が検出されている。石斧類はほとんどが未成品で27のみが長軸方向にステップ状に剥離しているのもので使用による刃部の欠損を示すのかもしれない。他はほとんどが敲打による整形段階で欠損放棄もしくは中断している。製品化した段階では弱冠小さくなると思われるが、現状で大まかに大(27、28)中(21、22、23、29、30、32、33、34、35)小(24、31)に分けられそうであるが、欠損品のため数値化して分類するには難がある。形態的特徴として、やや薄手で刃部に広く基端部に狭いものが多いと言える。詳細については後述



第25图 石器实测图(1/1)



第26図 石器・土製品実測図 (1/1)

する。25, 26, 38~44は石斧の整形に用られた敲打具である。44はホルンフェルス、26, 43は玄武岩、他は緑色片岩製である。26は石斧の未成欠損品を再利用したものですり石の可能性もある。アバタ状の窪みを持つもの(38, 39, 40, 43)フラット面を持つもの(41, 42他)打面が特定できないもの(25)などがある。

石斧類は中期に、石錘や碧玉類は後期後半代に比定しうる。

中世

16は土製の器物の脚部片と思われる。17は良質な滑石を用いた紐のつくコテ状の工具片である。瓦器碗が出土する時期に多く見られるので概期の所産であろう。

その他

46から48は砥石である。集落内で石斧生産や玉類生産の可能性があり注目されるところであるが、いかんせん時期を限定できない。49は三面に面取りのある玄武岩製のもの。用途不明。

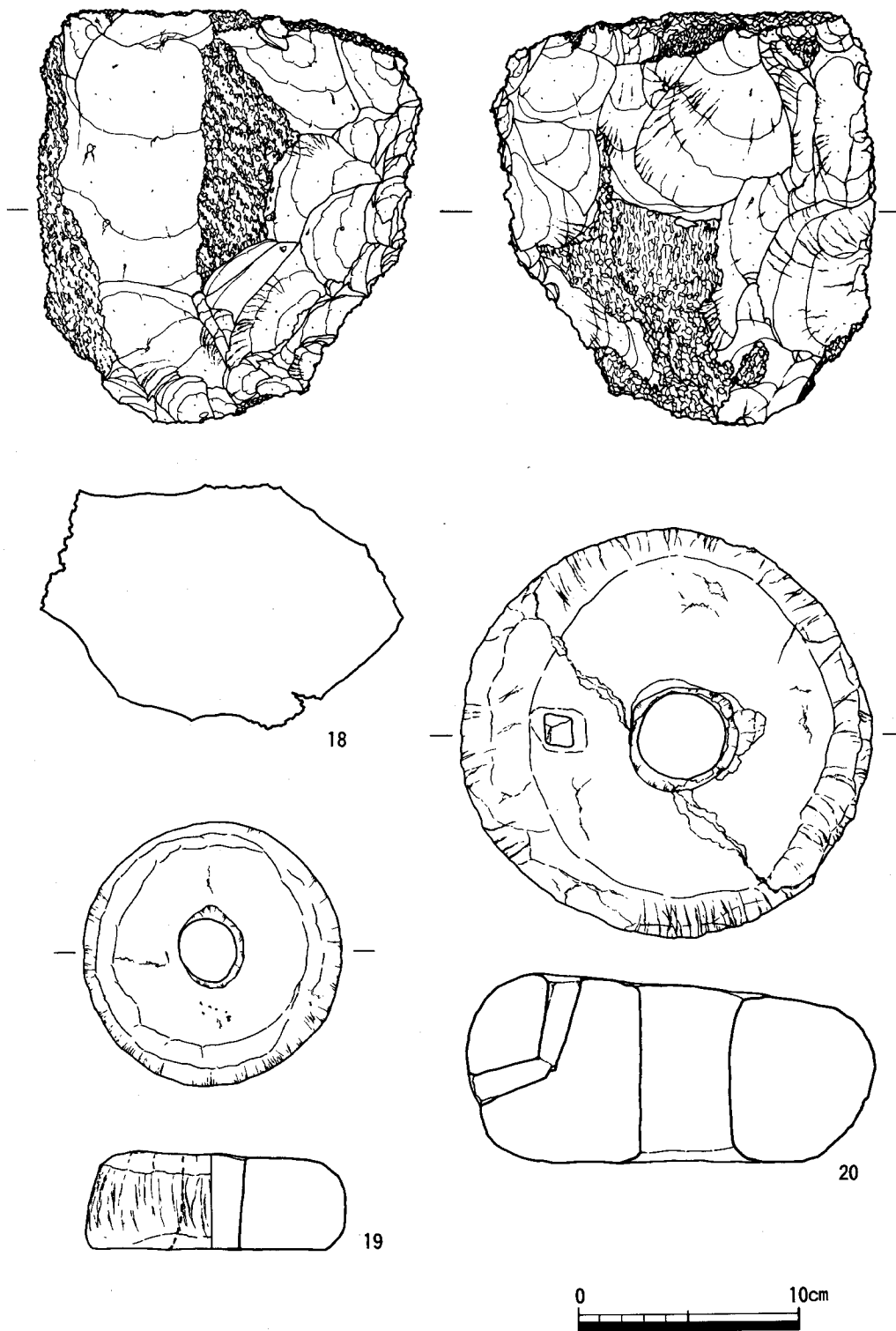
～ 備考 (石器素材について) ～

- 赤褐色チャート 福岡市近郊には知られておらず近くは関門層群中に産し、南は臼杵～八代構造線周辺に多く見られる。一般に深海性のものが赤褐色を呈す。
- 黒曜石 いづれも光沢のある漆黒色を呈すもので、肉眼では佐賀腰岳もしくはその周辺に産するものと考えられる。
- 安山岩 出土した石核は超角礫を用いたもので、新第三紀層が露頭する佐賀県中部域から礫状態のまま搬入されたものであろう。
- 碧玉 濃緑色を呈すいわゆる「出雲石」である。市内では有田・飯盛・博多・瑞穂などから原石や未成品(多くは剝片)の形で出土している。
- 滑石 中世のコテ状工具に用いられている。純度の高いもので近くは篠栗地区の三郡変成岩類中に見られるが、産地としては長崎県西彼杵が有名である。
- 滑石片石 有孔石錘に用いられている。往来「滑石製有孔石錘」と言われているごとくその脂的な肌ざわりから滑石と見られていたが、滑石より硬質で縞状の片理が見られる特徴から滑石片岩であると考えられる。近くは三郡変成岩類が露頭する糸島半島は今津の浜崎に産するものに類似する。顕微鏡観察による同定作業を要する。
- 玄武岩 出土したものはすべて風化している。今宿今山や今津毘沙門山の頂部に露頭する。出土した石斧類はいづれかの周辺に散布する転礫を持ち帰ったものであろう。また能古島にも露頭がある。
- 緑色片岩 敲打具の11点中7点がこの岩石を用いている。やはり糸島半島東部や飯盛山南部の飯場峠付近の三郡変成岩類中に産す。今宿五郎江遺跡などでは3～40cmほどの円礫として持ち込まれている。

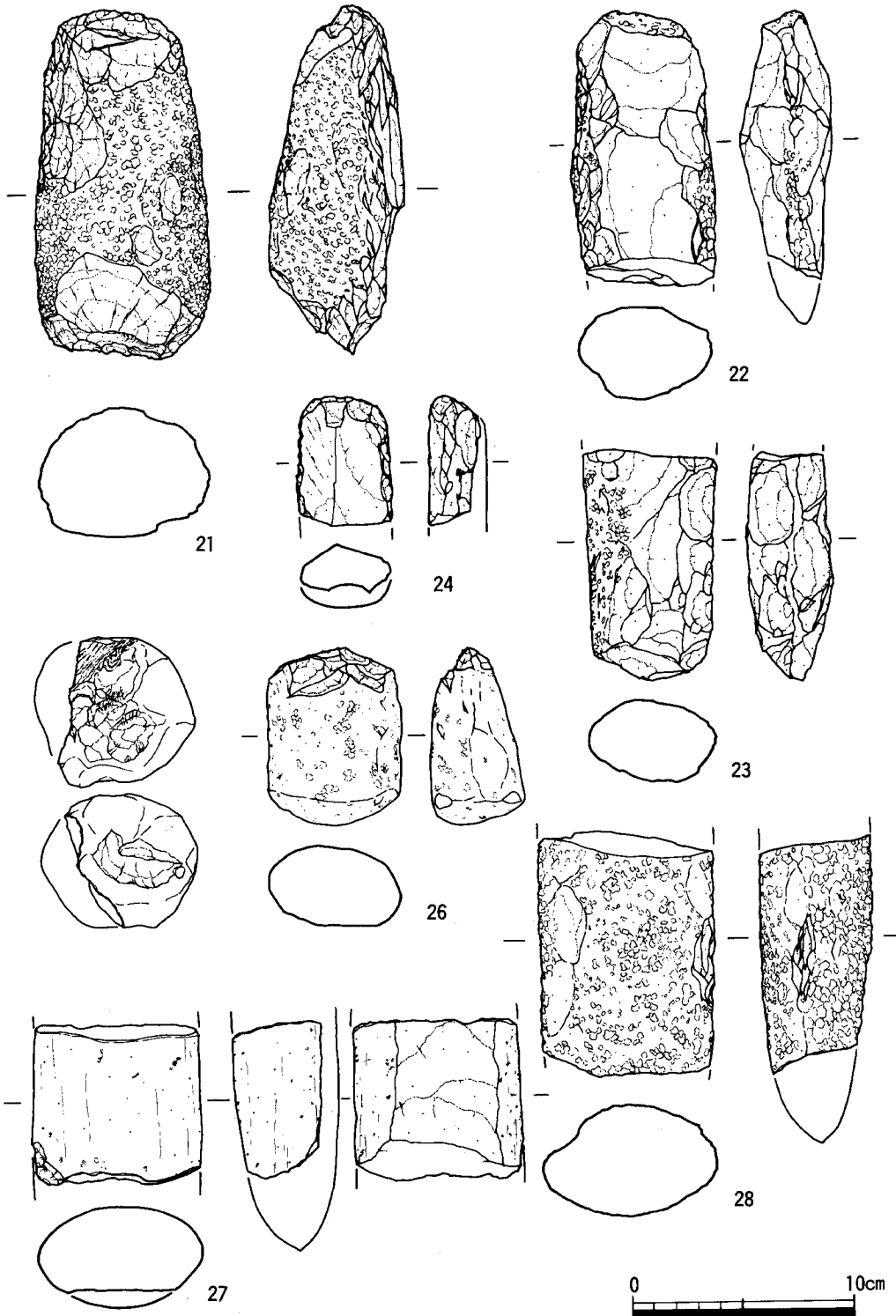
〈参考文献〉

- 「福岡県の地学ハイキング」 福岡県高等学校地学部編 1979年
「日本地方地質誌 九州地方」 松本達朗他 朝倉書店
「福岡地盤図」 九州地質業協会 向山広他 1976年
「岩石鉱物」 木下亀城・小川留太郎 保育社
「原色岩石図鑑」 益富壽之助 保育社

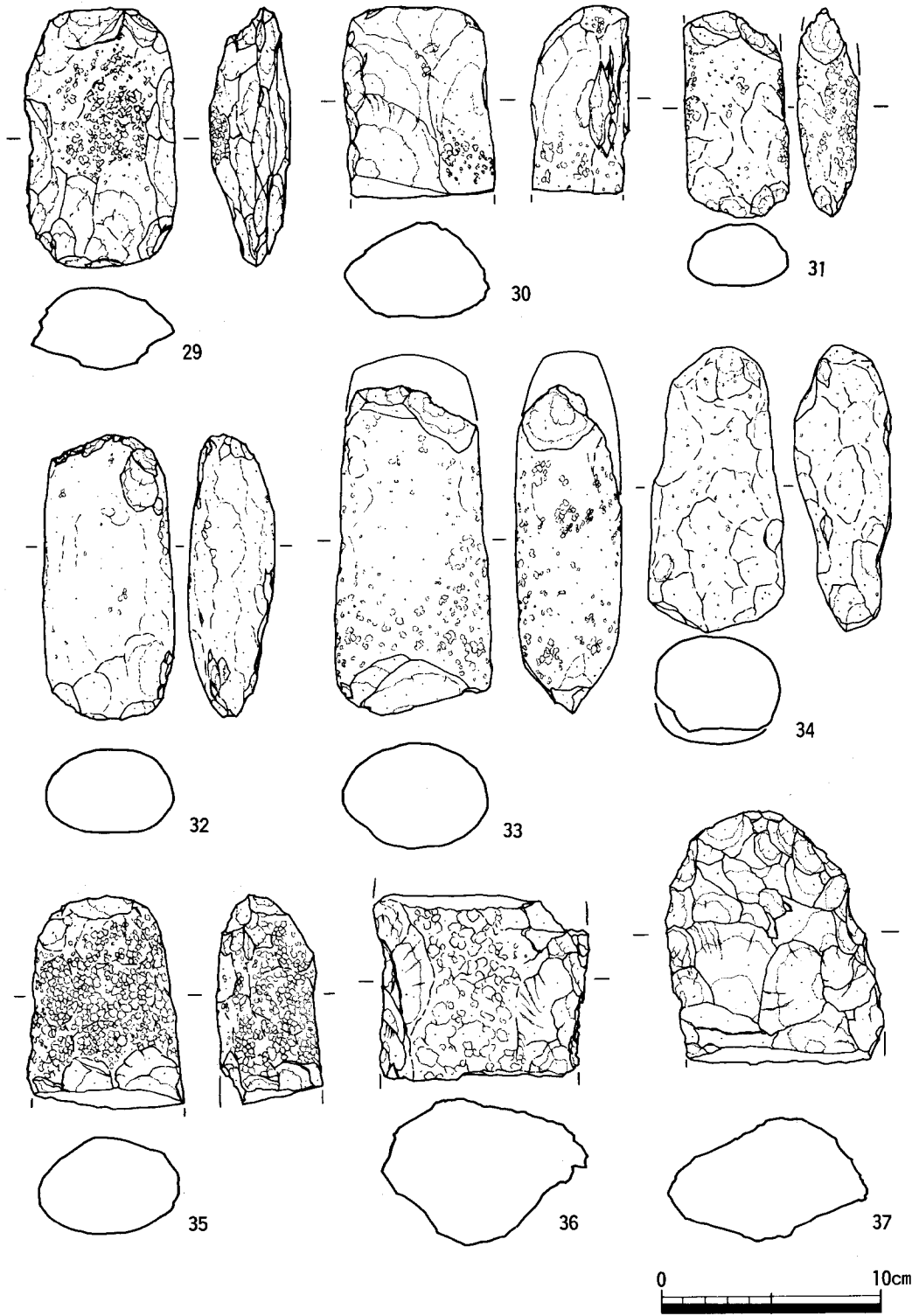
※ この項については岩本陽児氏(九州大学大学院)の御教示を受けた。



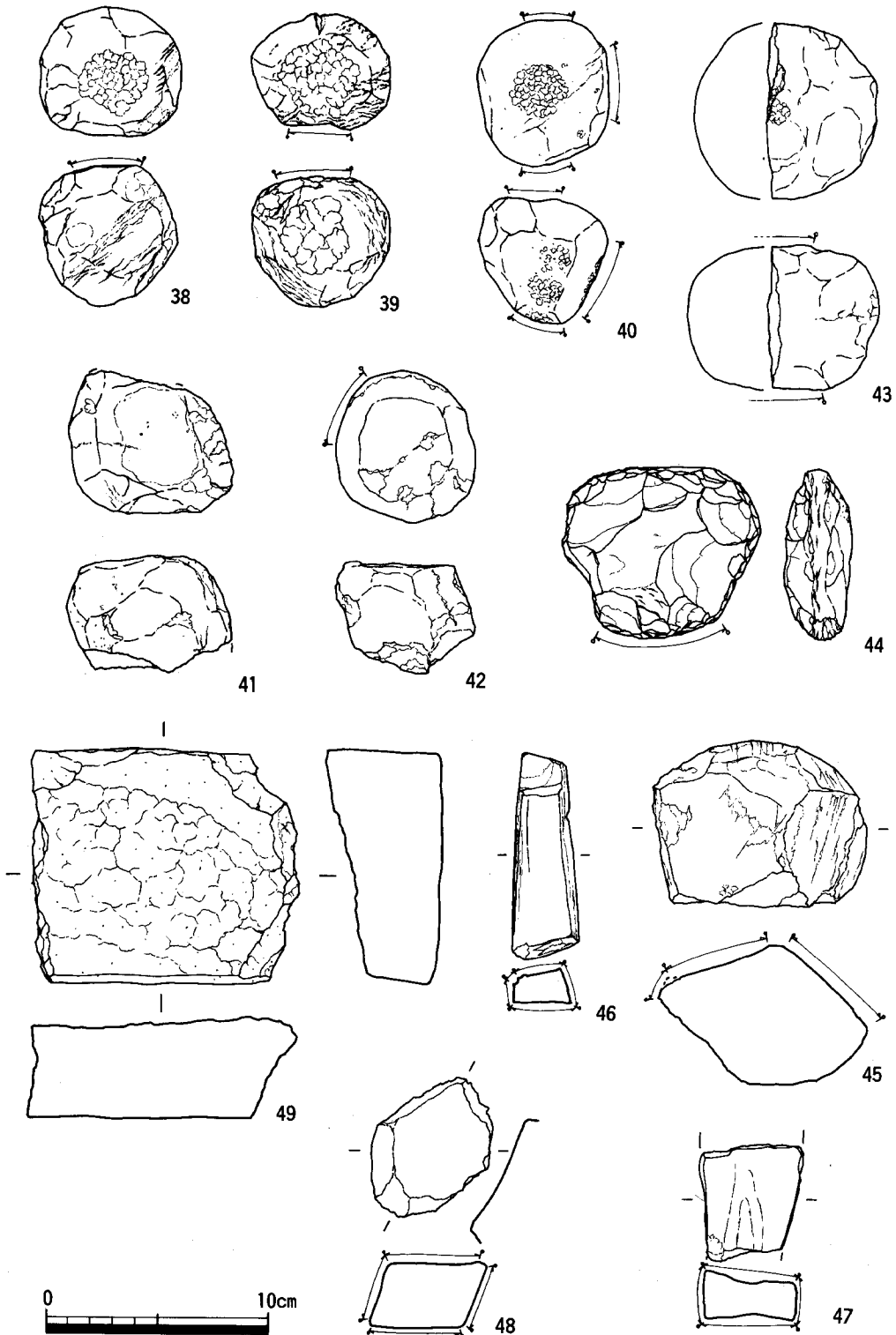
第27图 石器实测图(1/3)



第28图 石器实测图(1/3)



第29图 石器实测图(1/3)



第30图 石器实测图 (1/3)

磨製石斧について

1. 出土状況と時期について

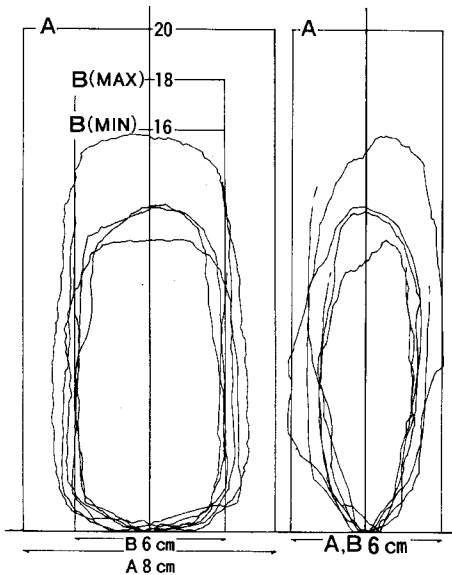
現場での出土状況は後世の削平が著しく、SK14の一括資料をのぞくほとんどのものが二次堆積遺物として取り上げられた。しかし、図示しえなかった石斧未成品やフレークの中に確実に中期前半代の城の越式土器を伴う例があることなどから、これら未成石斧類が中期前葉からそれに続く時期の所産であると考えられる。

また、敲打具が多数出土すること、出土した石斧の中に砥ぎ工程まで至ったものが一点もないこと。またそれを裏付ける様にそれらしい砥石が出土していないこと。他の石器類（石庖丁他）の未成品が出土していないことなどから、石斧を専ら製作する工房があり、それらは集落内での自己消費的な生産でなかったことを示している。

2. 製作過程について

素材については図示しえなかったが乳幼児頭大の円礫が出土しており、後述のとうり石斧自体の法量の小ささからこれら円礫が用いられたものと思われる。

図示した資料から製作過程を追ってゆくと、円礫を打ち欠き2面から3面程度の大きな剥離から構成する面を利用し（自然面を利用するものは確認していない）その裏面の状態によっては小さな剥離調整をし（37）次に両サイドの凹凸を取る剥離調整もしくは直接敲打を施すものがある（22, 23, 24, 30）。敲打調整は基本的に鞍部から開始するもの（28, 36）と側面から開始するもの（22, 23）とがある。敲打により整形が進んだもの（21, 28, 35）と、さらに進んだもの（31, 32, 33, 34）とがあるが、後者の段階に至っても刃部の剥離痕は残されたままである。



第31図 法量比較図

3. 法量について

第31図で示すとうり、法量的には今山42・43地点での分類（A—大型、B—小型、C—楔型）と比較した場合。幅でB類と同等もしくはそれを凌ぐが、長さや厚さではまったく及ばないことがわかる。つまり今山42・43地点での石斧生産に存在する規格とはそぐわない、製品としては別のものであることがわかる。使用目的の差、需要要求の差、生産集団の属性の差など色々な原因が考えられるがやはり主因としては使用された原材料の差から来ると見るのが妥当であろう。また幅だけに於いてはA類に近いものがある（27・28）が、欠損品であるのでそれ以上は何とも言えない。

4. いわゆる楔型について

今宿今山42・43地点での分類のC類に当たるとされるものが出土しているが(24・31)、これらもひと回り小さい。用途については消費地での使用痕の観察を待って再考すべきと考える。

5. 敲打具について

考察には至っていないので問題点のみをメモ的に残しておく。

- 1) 本分中でアバタ状の窪みを持つものとフラット面を持つものとの二者があることを指摘したが、後者のフラット面の流理に沿った気泡状の岩石の持つ組織がつぶれた状況は何によるものなのか(PeckingのみならずGrindingに供されたものか?また別の理由によるものか)
- 2) 緑色片岩に強い選択性が働いている。(玄武岩同様搬入素材である。)
- 3) 敲打は直接打法によるものか(今回も中介具らしいものは見られなかった)。

6. まとめ

今回出土したこれら未成石器群は、同じ平野内に存在する石斧生産で有名な今山遺跡と同時期に営まれた、付近に原石を持たない集落内で生産されたものであった。その内容も「今山規格」とは別個のものであり明らかに属性差を示している。今山とは直線で2km程度の示近距離にありながらその恩恵に浴さず、歩止まりの悪い生産を行っていたのはなぜなのだろうか。早良区の湯納遺跡にも同様な状況がうかがえる。今後、今山内の各地点での資料の整理が進み、また今山周辺での同時期の集落の調査・研究が進み、「専門集団」と言われる集団とそれを抱える社会構造の実体解明に近づけることを切望する。

〈参考文献〉

- 中山平次郎 「筑前国糸島郡今津の貝塚」 考古学雑誌 6-6 1916年
 〃 「今山の石斧製作所址」 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 6 1931年
- 福岡市教育委員会 「今山遺跡」(1)福岡市埋蔵文化財報告書22 1973年
 下條 信行 「今山遺跡」 福岡市歴史資料館調査研究報告 1 1973年
 〃 「北九州における弥生時代の石器生産」 考古学研究22-1 1975年
- 福岡市教育委員会 「今山・今宿遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書75 1981年
 〃 「今山遺跡」 現地説明会パンフレット 1984年
- 佐原 真 「石斧論」 考古論叢 1977年
 〃 「石斧再論」 森貞次郎博士古稀記念古文化論集 1982年

青木遺跡出土石器・土製品観察表

- 〈凡 例〉
- 番号は挿図と図版中に付された遺物番号に一致する。
 - 法量はセンチメートル(cm)とグラム(g)単位である。
 - 数値の後の×マークは欠損時の数値である。
 - 石斧の加工段階はⅠ(粗割), Ⅱ(小剥離), Ⅲ(敲打), Ⅳ(磨研)でローマ字のみを表記した。

番号	遺 構	全 長	幅		厚 さ	重 量	残存状況	加工段階	石 質	器 種	備 考
			刃部幅	基部幅							
1	表土層	5.5	4.1		1.8	39	完 形	—	赤褐色チャート	スクレーパー	
2	SD24	2.4	2.7		1.2	10	〃	—	〃	石 核	一面剥離両設打面
3	P 349	3.1	1.5		1.3	6	—	—	黒曜石	楔型石器	紡錘形タイプ
4		2.0×	1.5		0.5	×	先端欠損	—	〃	石 鏃	
5	SK01	2.5	3.2		1.3		—	—	〃	石 核	一面剥離両設打面
6	P 24	3.2	3.5		0.6	10	完 形	—	安山岩	エンドスクレーパー	
7		3.6	2.6		0.8		—	—	黒曜石	R F	
8		2.2	1.1		0.5		—	—	〃	U F	原石表皮残る
9		6.4×	3.8		0.8	42×	刃部欠損	—	珪質泥岩	扁平片刃石斧	
10	P5309	2.7×	1.4		1.0×	5×	1/2 片	—	頁 岩	有溝石錘	
11	P5319	1.2	1.2		0.6		破 片	荒砥ぎ	碧 玉	玉 類	未成品欠損
12	SK10	1.6	2.5		0.7		—	剥 片	〃	剥 片	
13	SD02	1.8	2.3		0.4		—	〃	〃	〃	風化する
14	SK10	1.8	2.8		1.0		—	側辺小剥離	〃	〃	未成品?
15	P 23	2.2	3.0		0.6		—	剥 片	〃	剥 片	
16	P5199	8.6×	1.9		1.9	29	脚部片	—	土製品	器物脚部	鼎脚状。瓦質
17	P5219	3.9×	2.5×		2.9	30×	紐部片	—	滑 石	コテ状工具	側面穿孔あり。
18	表土層	18.6	17.6		12.9		—	表皮剥取	安山岩	石 核	超角礫利用
19	〃	11.6	11.9		4.4		完 形	—	滑石片岩	有孔石錘	環状
20	〃	18.2	18.5		8.5		〃	—	〃	〃	
21	SK14	15.8	7.8 5.7		6.2	1160	完 形	Ⅲ	玄武岩(風化)	磨製石斧	未成品
22	〃	12.4×	5.9×5.5		4.1	506×	3/4 片	Ⅱ~Ⅲ	〃	〃	〃 欠損
23	〃	10.4×	5.4		3.8	393×	3/4 片	〃	〃	〃	〃 〃
24	〃	5.9×	4.3		2.4×	90×	1/2 片	Ⅱ	〃	〃	〃 〃
25	〃	6.0	6.2		6.0	395×	3/4 片	—	緑色片岩	敲 打 具	打面不特定
26	〃	8.0	6.0		4.2	340	完 形	—	玄武岩(風化)	〃	すり石の可能性あり
27	SK26	7.2×	7.6×		3.8×	440×	基部片	完成品?	〃	磨製石斧	使用による欠損か?
28	SC03	11.0×	8.0×		5.0	772×	〃	Ⅲ	〃	〃	未成品欠損
29	SC02	11.7	6.5 6.9		3.7	421	完 形	Ⅱ~Ⅲ	〃	〃	〃
30	SD29	8.6×	6.9		4.5	466×	1/2 片	〃	〃	〃	〃 欠損
31	SD28	9.4×	4.74.5×		2.9	208×	〃	Ⅲ	〃	〃	〃 〃
32	SK36	7.9	5.3 5.3		4.0	535	完 形	〃	〃	〃	〃 〃
33	P 15	14.9	7.16.1×		4.8	860×	基部部欠損	〃	〃	〃	〃 〃
34	P5193	13.0	6.2 4.5		4.4	565	完 形	〃	〃	〃	〃 〃
35	P 15	9.6×	7.0×		4.6×	485×	3/4 片	〃	〃	〃	〃 〃
36	SD21	8.5×	9.8		6.6	874×	胴部片	〃	〃	〃	〃 〃
37	〃	11.5×	9.9		5.5	902×	3/4 片	Ⅱ(片面のみ)	〃	〃	〃 〃
38	SK03	5.7	6.3		6.4	405	完 形	—	緑色片岩	敲 打 具	
39	SK25	5.2	6.3		6.0	310	〃	—	〃	〃	
40	SD01	6.6	5.9		5.7	385	〃	—	〃	〃	
41	SD08	6.4	7.3		5.3×	394×	3/4 片	—	〃	〃	
42	P 51	6.9	6.4		5.0	320	完 形	—	〃	〃	
43	SK24	8.0×	5.0×		7.5	362×	1/2 片	—	玄武岩(風化)	〃	
44	P5268	7.7	9.0		3.0	296	完 形	—	黒雲母ホルンフェルス	〃	
45	SK27	7.4	9.6		6.3	505×	欠 損	—	砂 岩	砥 石	
46	SD08	9.3	3.1		1.6	62	完 形	—	〃	〃	左辺に鋭い溝あり
47	SD30	5.3	4.6		2.8	75×	欠 損	—	〃	〃	中央が長軸方向に凹
48	P5336	6.3	5.4		3.0	133×	〃	—	アブライト	〃	
49	SK10	10.5	12.1×		5.3	1100×	〃	—	玄武岩(風化)	台 石 ?	3面に面取り

IV 小 結

今回の調査では、中世の集落と遺存状態は良くなかったが弥生時代中期中頃の集落、遺構の性格は判断としなかったが弥生時代後期後半の溝状遺構、同時期の甕棺墓を検出した。

中世の集落は掘立柱建物で構成されるが、掘方出土の土器細片から細かい時期は決定できなかった。しかし、土壙出土の掘方出土のものと器形が類似し法量を測定できる土師器から13世紀を中心とする時期に比定できよう。建物跡は重複した状態で検出されたが、前述の通り出土遺物から細かな時期決定ができないこと、柱穴の切り合い関係が建物としてまとまったものの中では見られないことから、時期別構成は明らかにできなかった。同時期の土壙の大半は土壙墓と考えられる。SK02・36でみられた方形、SK24・26でみられた楕円形の平面形に大別される。

弥生時代中期中頃の遺構は、調査区北側でまとまって検出された。竪穴住居SC01・02は壁がほとんど残存していなかったが、6個の支柱穴を六角形に配置する、径7m前後の円形住居跡である。同規模、同じ柱穴配置の例として、本遺跡から西へ約2kmの地点に位置する飯氏馬場遺跡^(註)で検出された住居跡がある。(但し、遺構の時期は弥生時代中期初頭)住居跡周辺部の掘立柱建物SB16～18の時期も柱穴掘方出土の土器片から、ほぼ同時期と考えられる。

弥生時代の土壙の内、SK01・10は中期初頭のもので、SK01は貯蔵穴の底面と考えられる。SK10の性格は不明であるが、石斧未成品を伴う。SK14はSC02の西側で検出され石斧未成品4点が出土している。どの遺構と関連するかは不明である。

弥生時代後期後半の遺構では、甕棺墓1基のほか、性格は不明であるが弧状にめぐるSD29等の溝状遺構を検出した。

多くの石斧未成品、碧玉剝片等の石器が出土したが、その多くは中世の土壙、柱穴覆土中の二次堆積のものである。プライマリーなものとしてSK01・10・14出土のものがあげられる。

註

福岡県教育委員会「飯氏馬場遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 1971

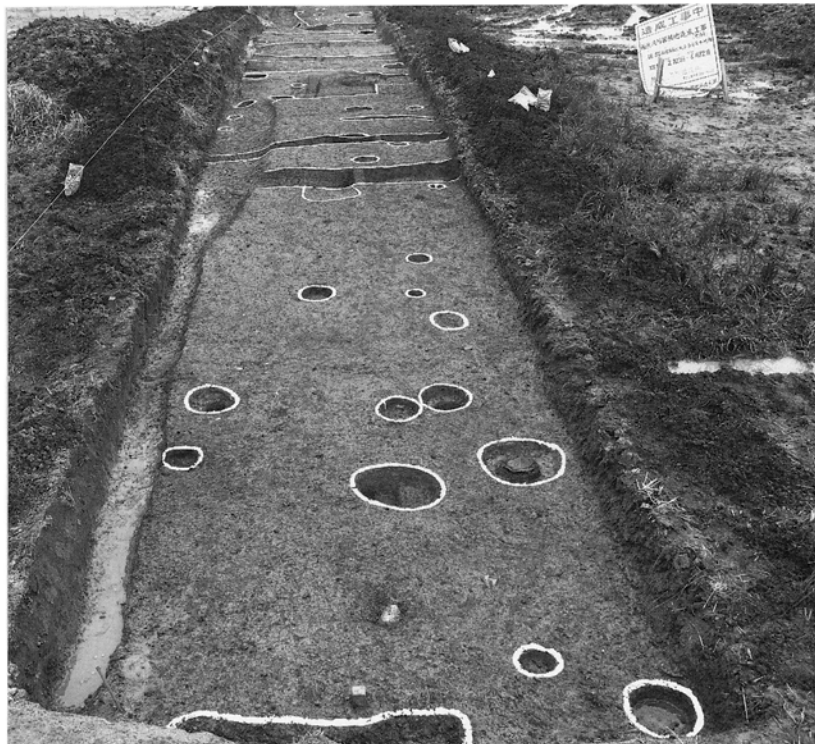
版 圖



▲調査前（西から）

調査前（東から）▼





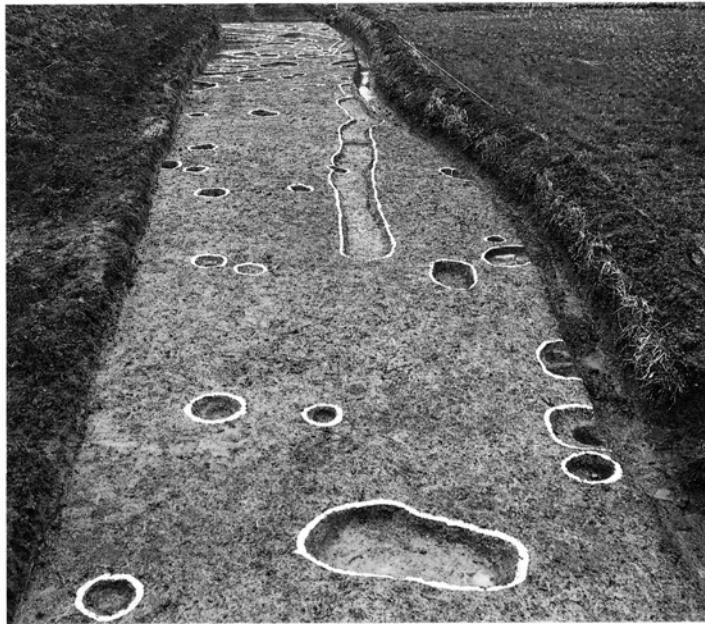
▲擁護壁部分調査区西側（南から）

擁護壁部分調査区西側（北から）▼





▲擁護壁部分調査区北側西半部（西から）
擁護壁部分調査区北側中央部（南から）▼





▲ 擁護壁部分調査区北側東半部（西から）

擁護壁部分調査区北側東半部（東から）▼





▲擁護壁部分調査区東側（北から）

擁護壁部分調査区東側北半部（南から）▼

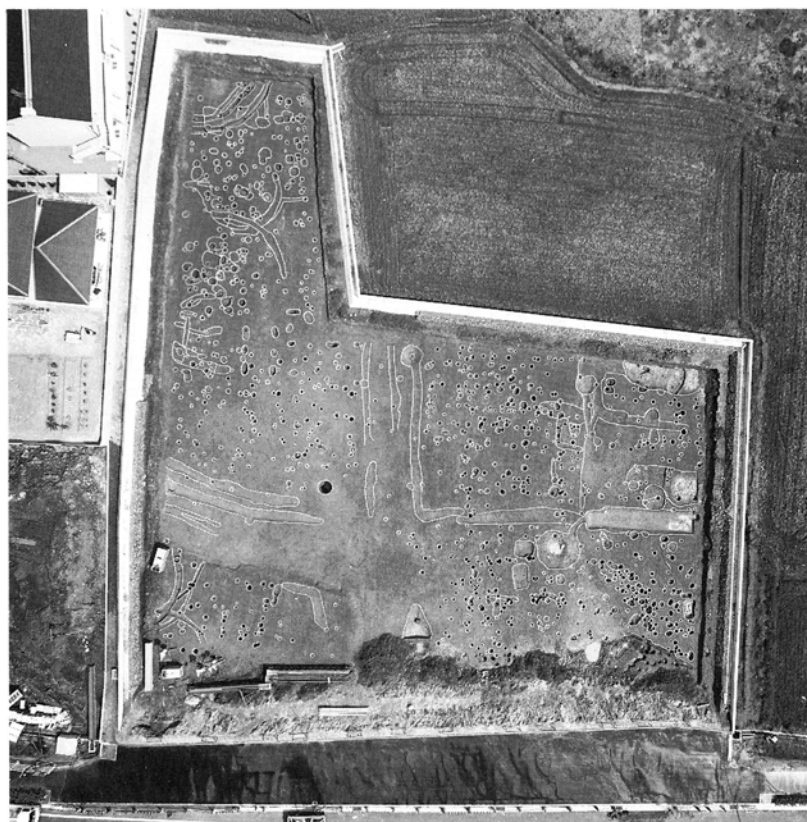




▲擁護壁部分調査区東側南半部（北から）

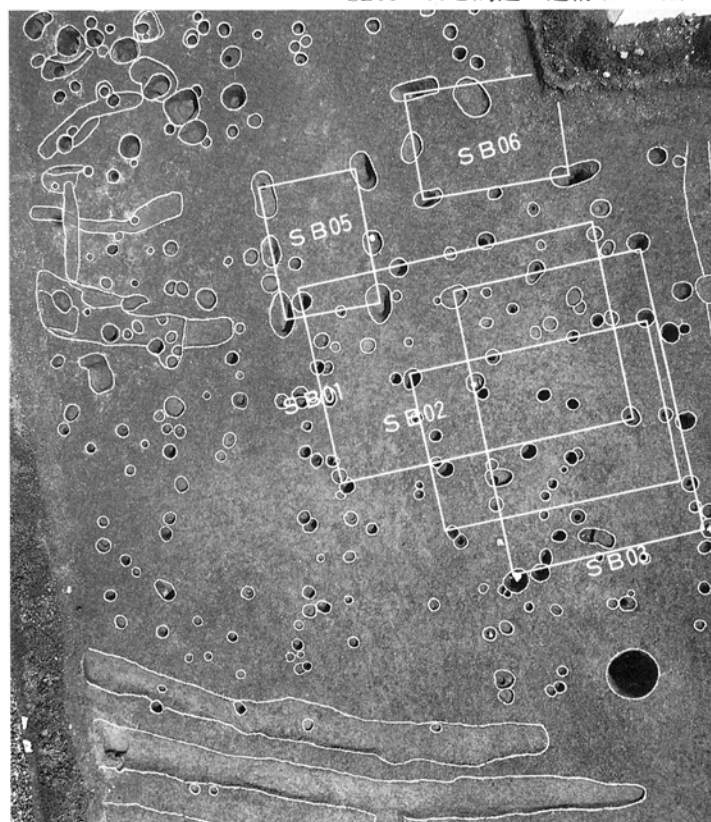
擁護壁部分調査区東側南半部（南から）▼

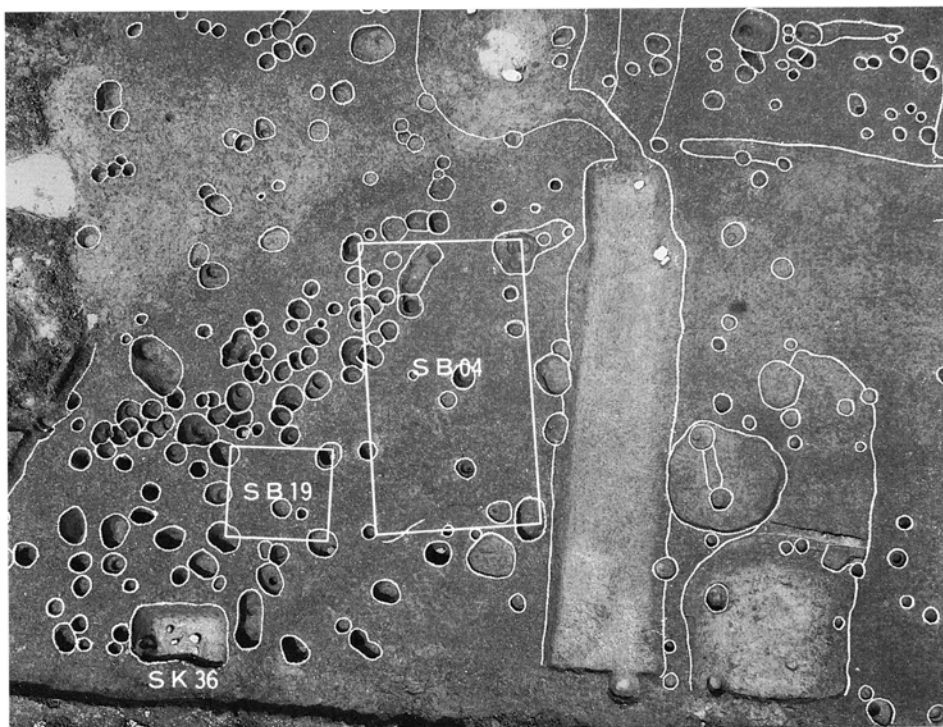




▲調査区全景(上が北)

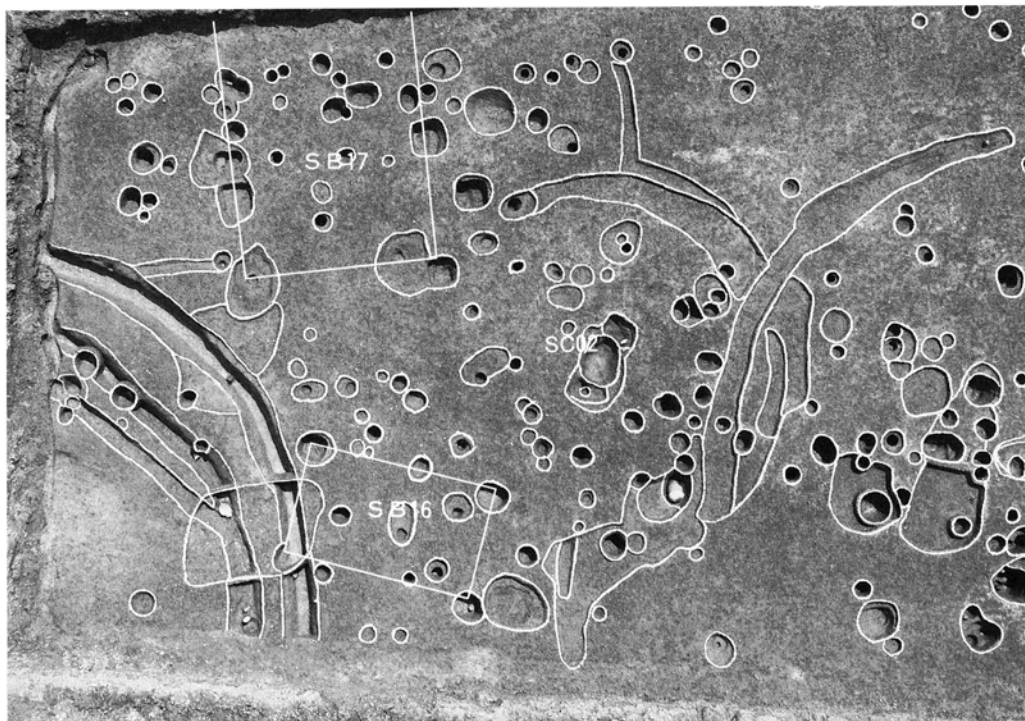
SB05・06と周辺の遺構(上が北)▼

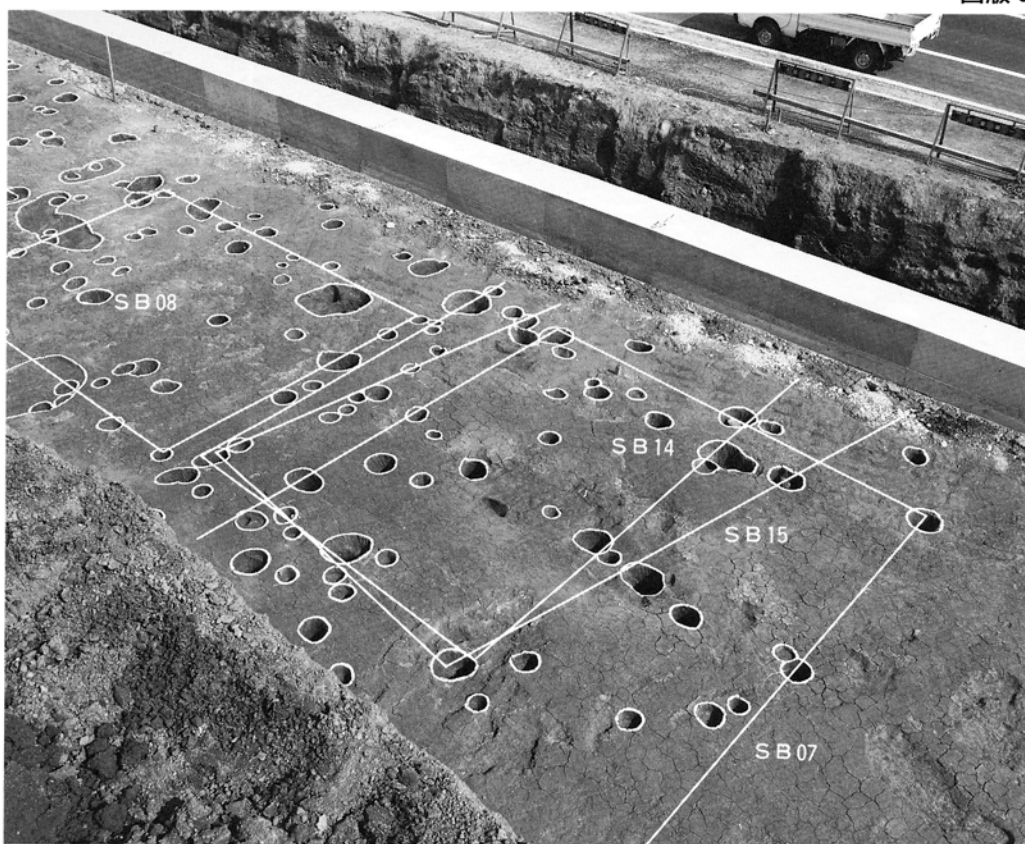




▲調査区東南(上が東)

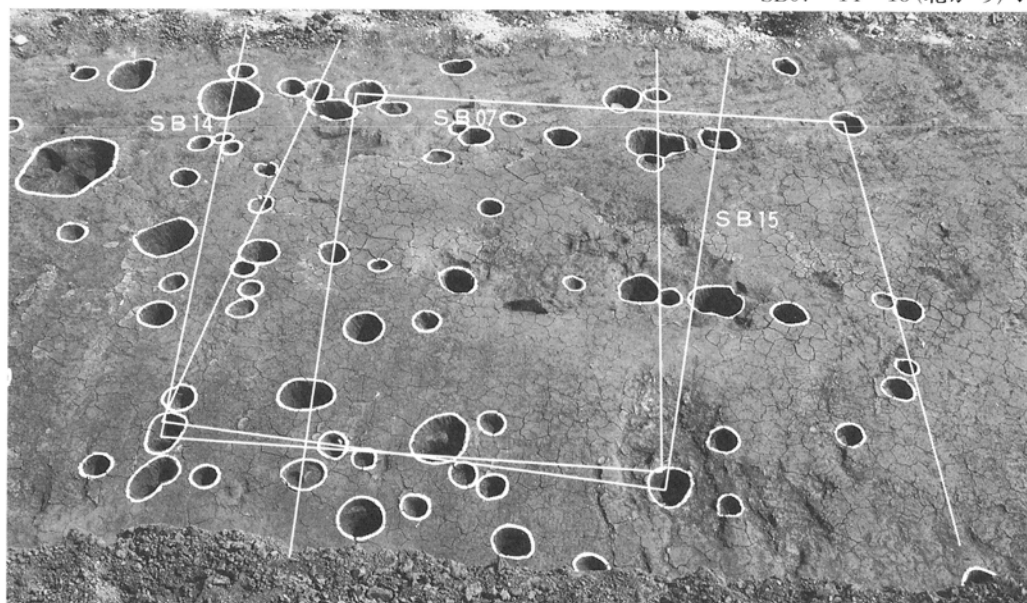
SC02と周辺の遺構(上が東)▼

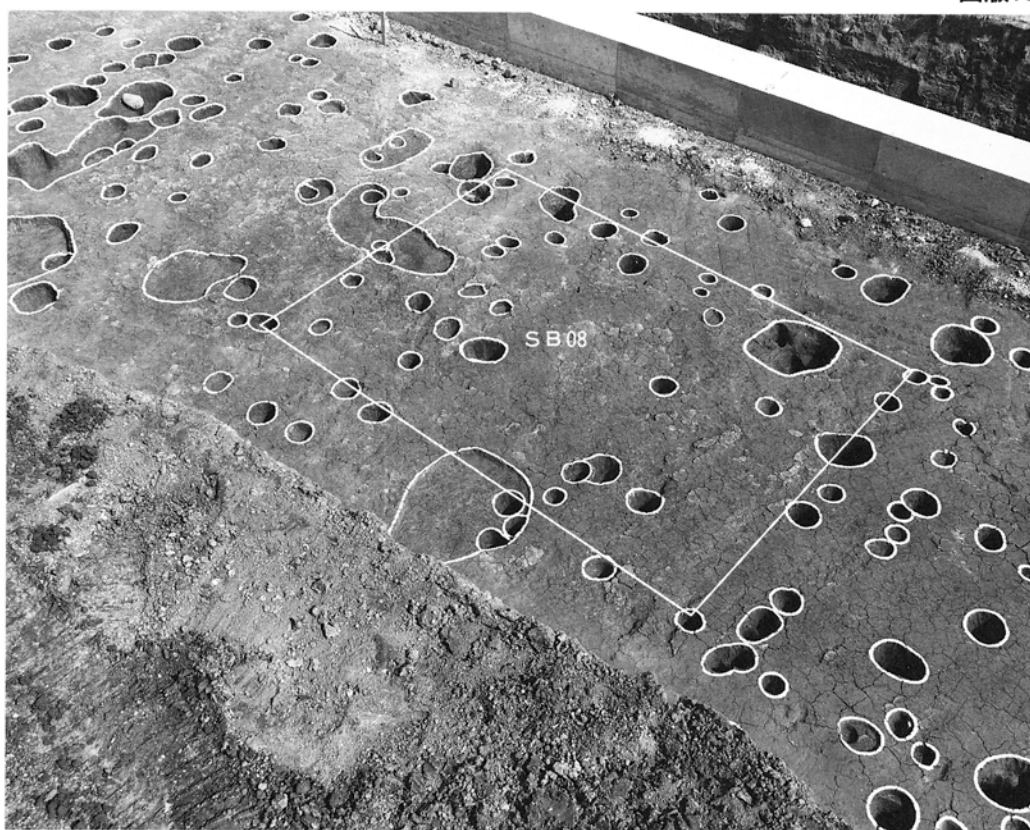




▲調査区南側中央(西北から)

SB07・14・15(北から)▼

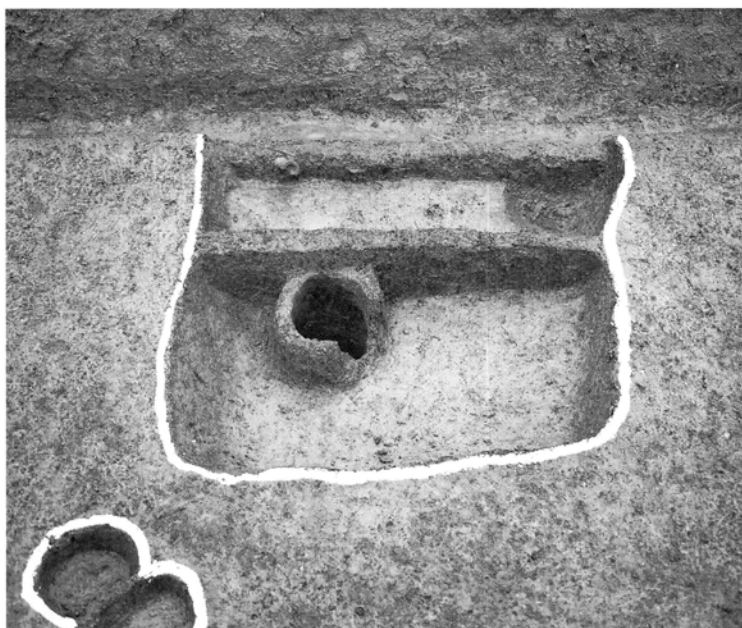




▲SB08 (西北から)

▼調査区東南(西北から)

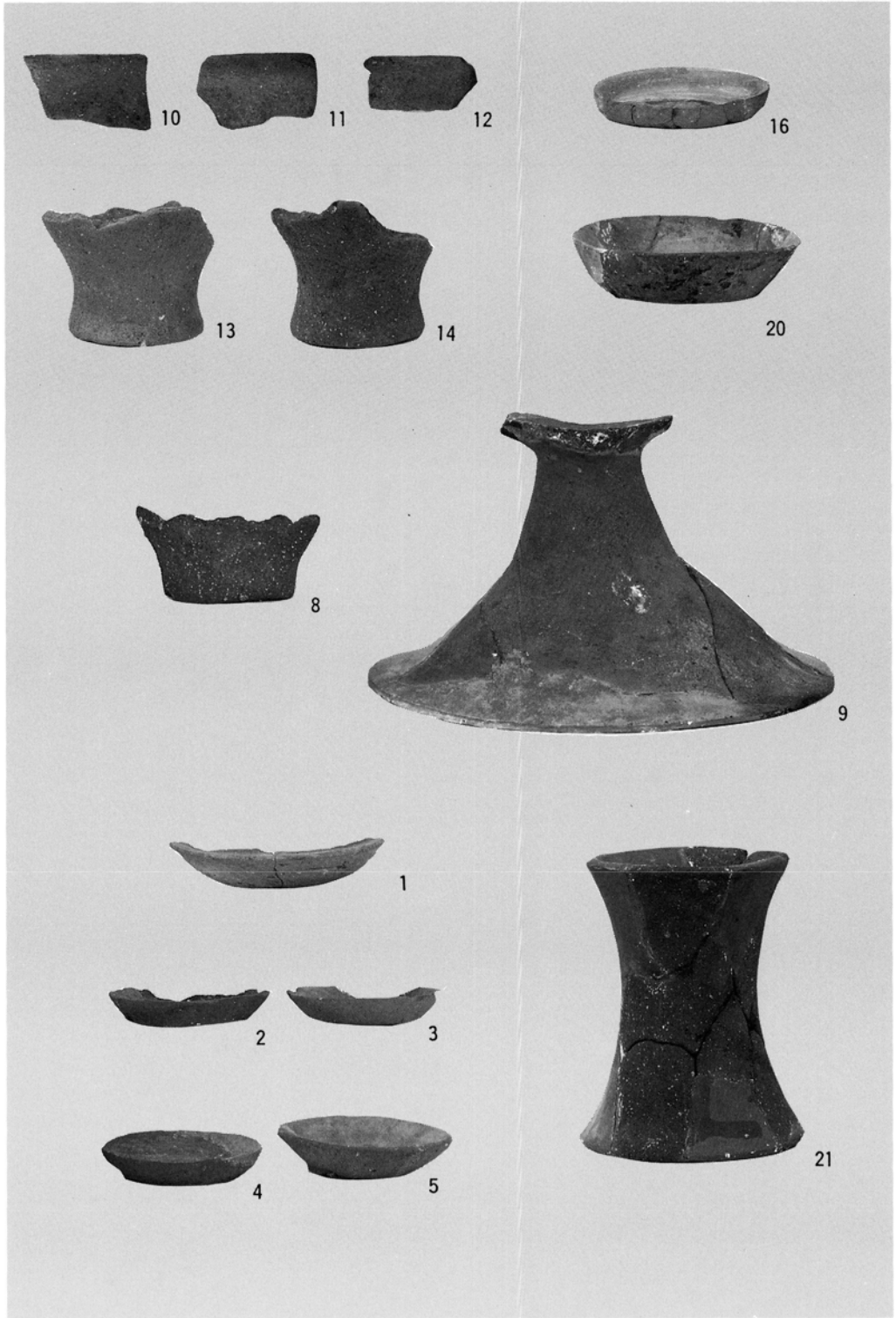




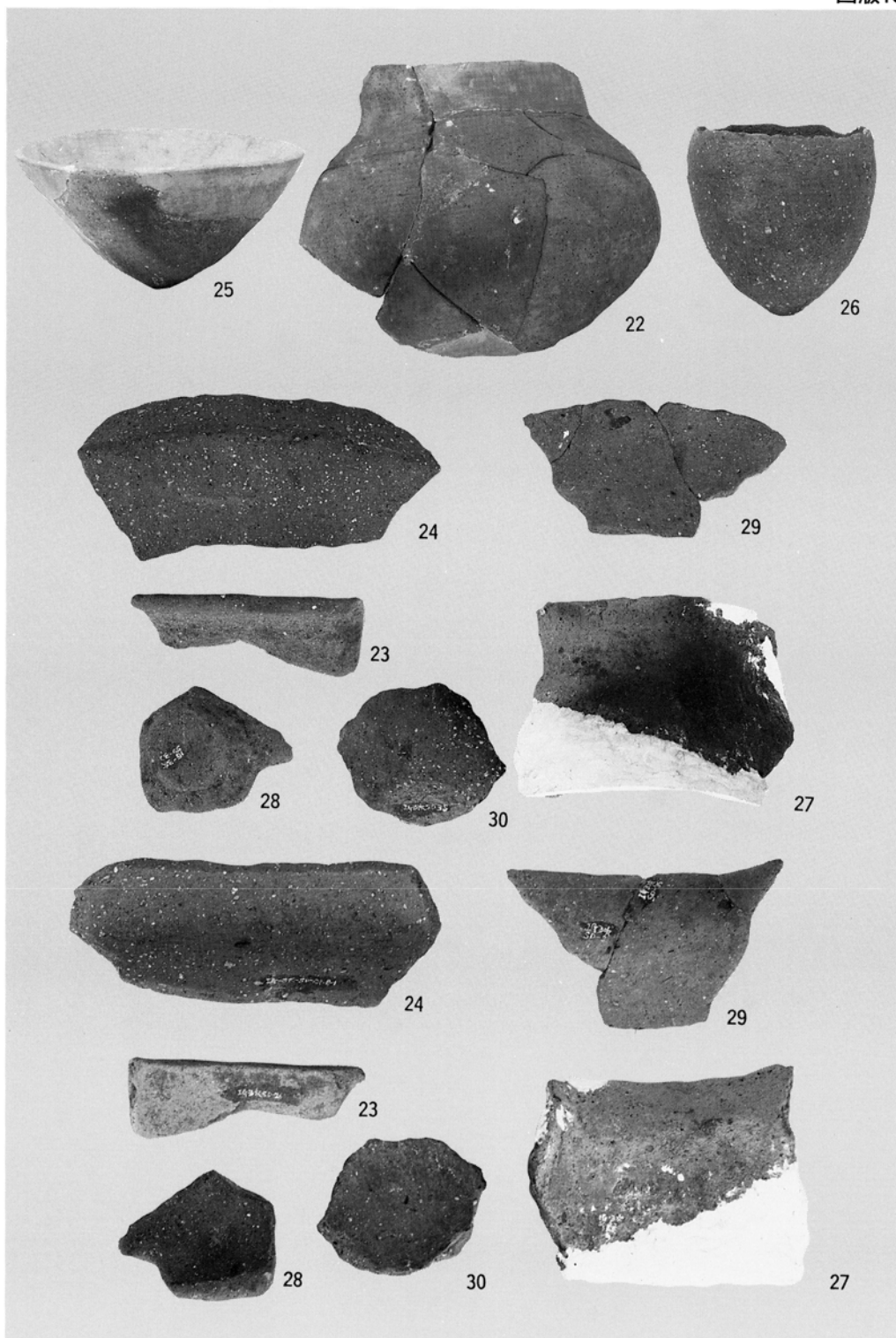
▲ S K01 (西から)

襲棺墓 (南から) ▼





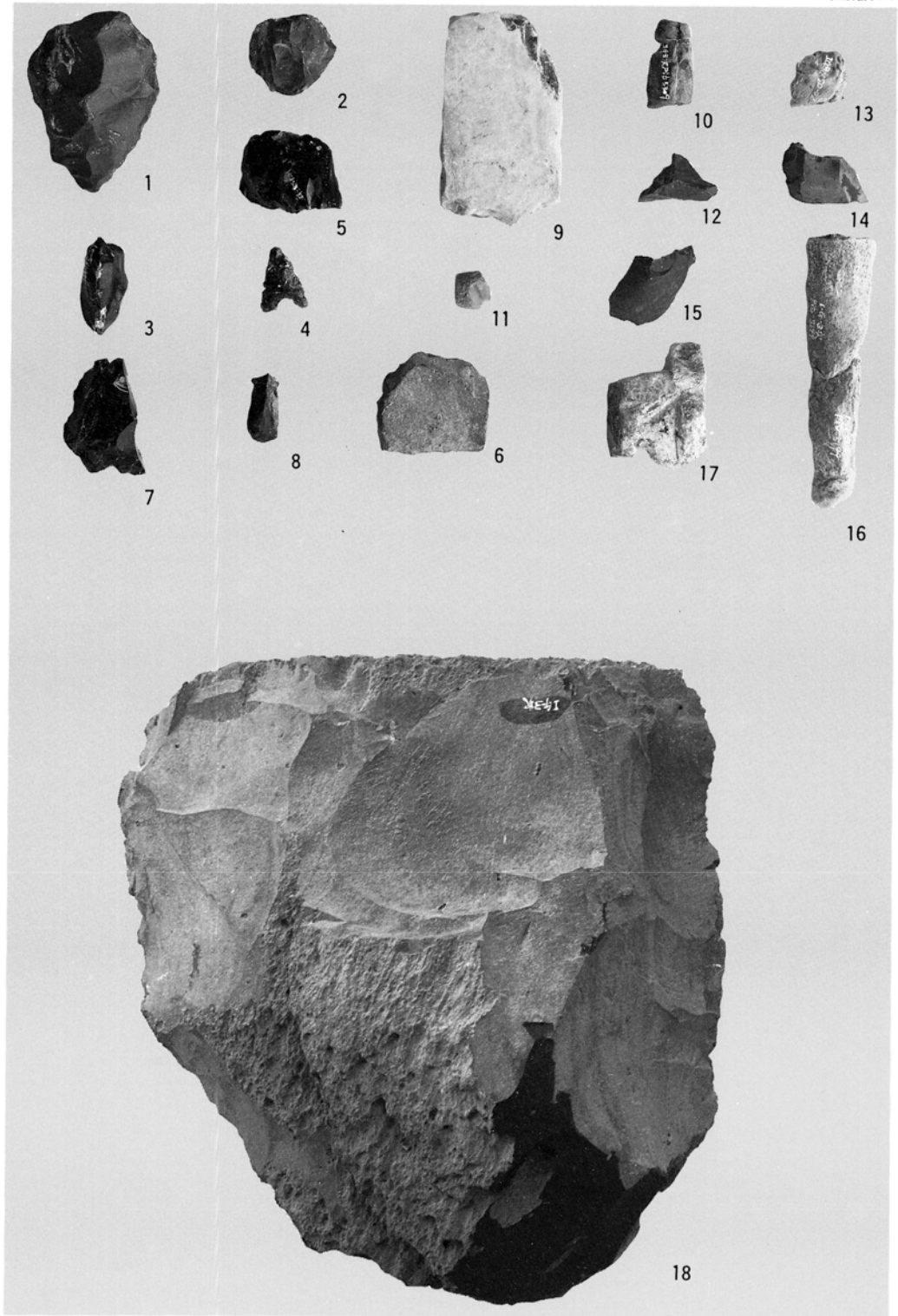
土壙・柱穴・溝出土遺物



溝出土遺物



甕 棺



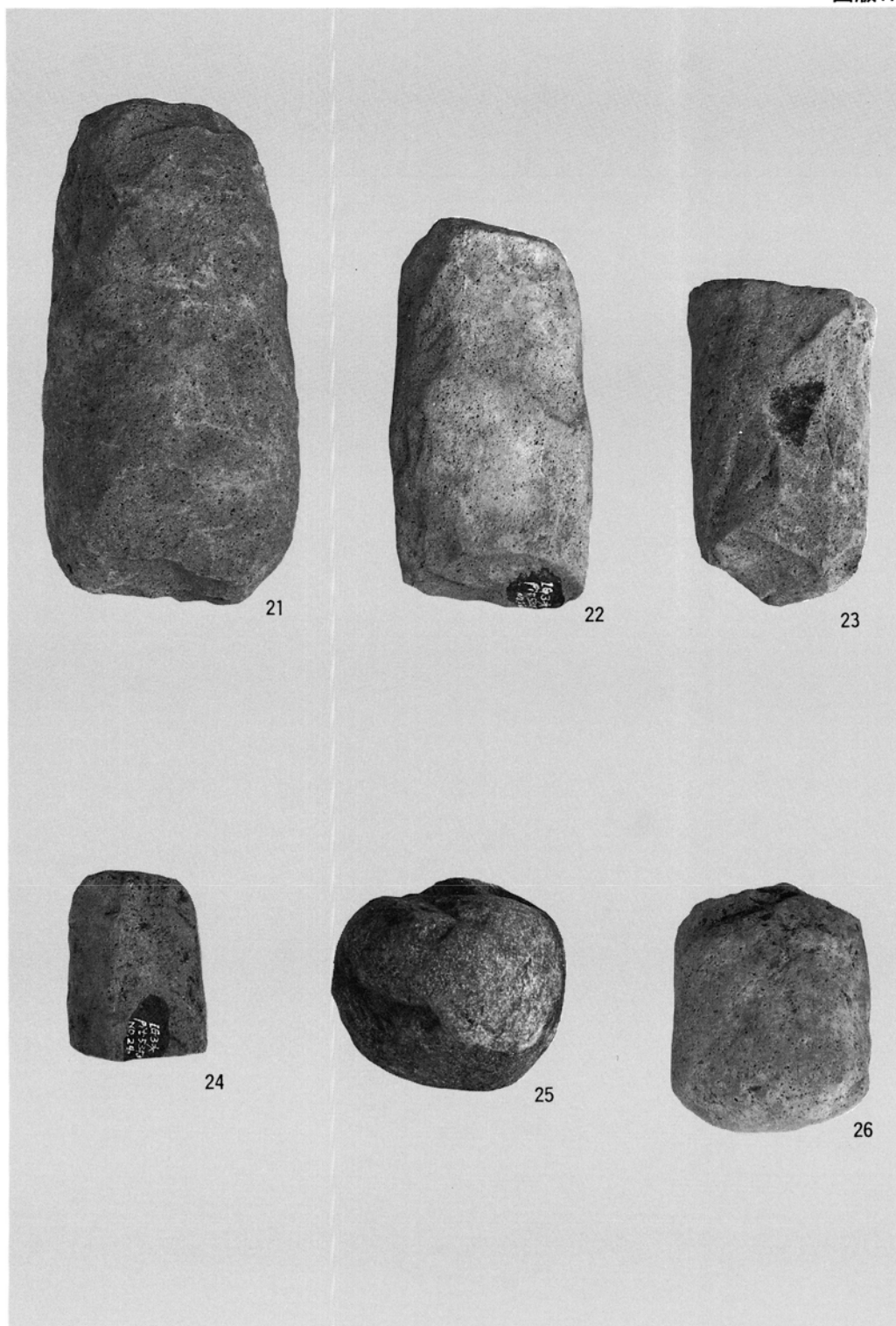
石器類(1)



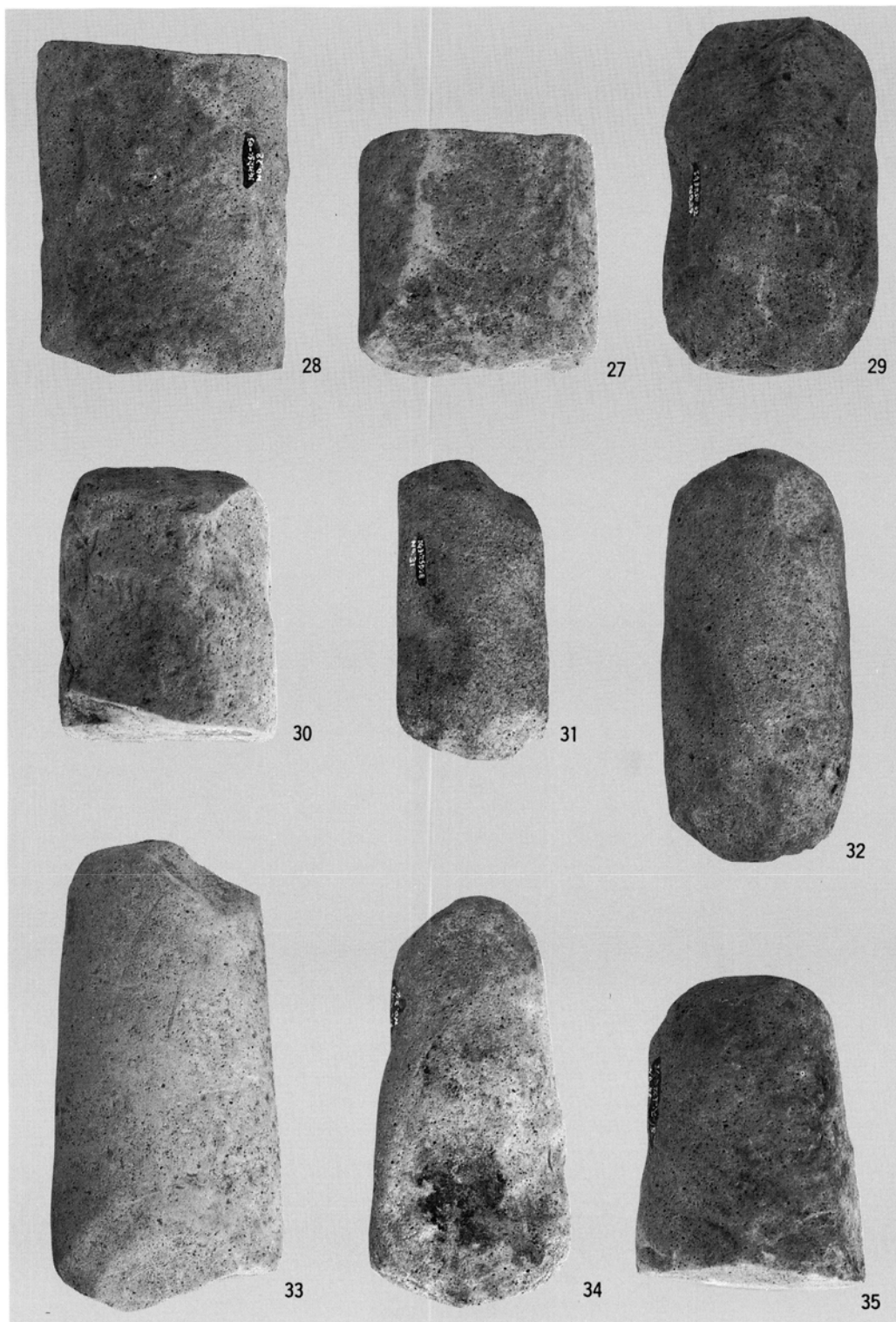
19

20

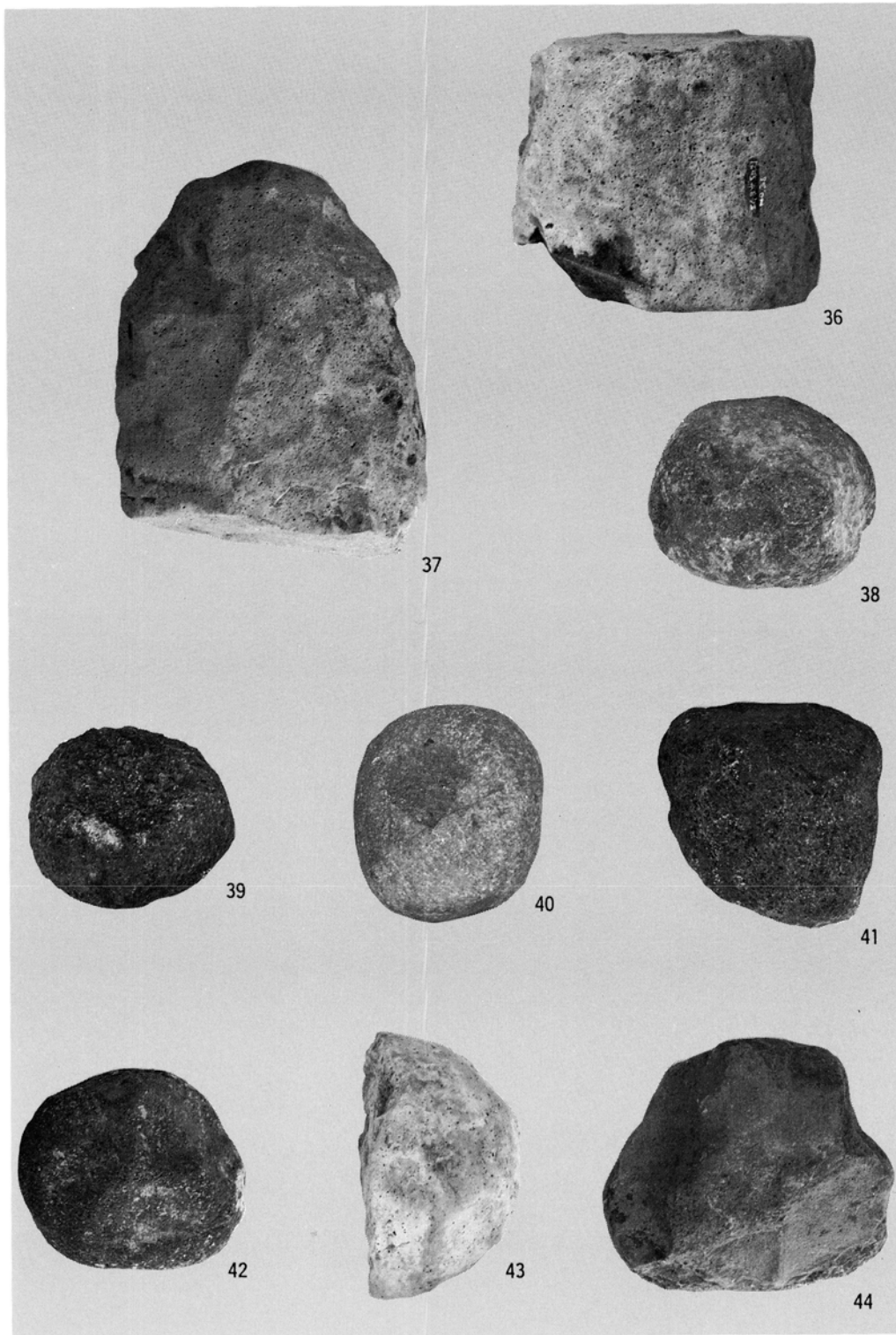
石器類(2)



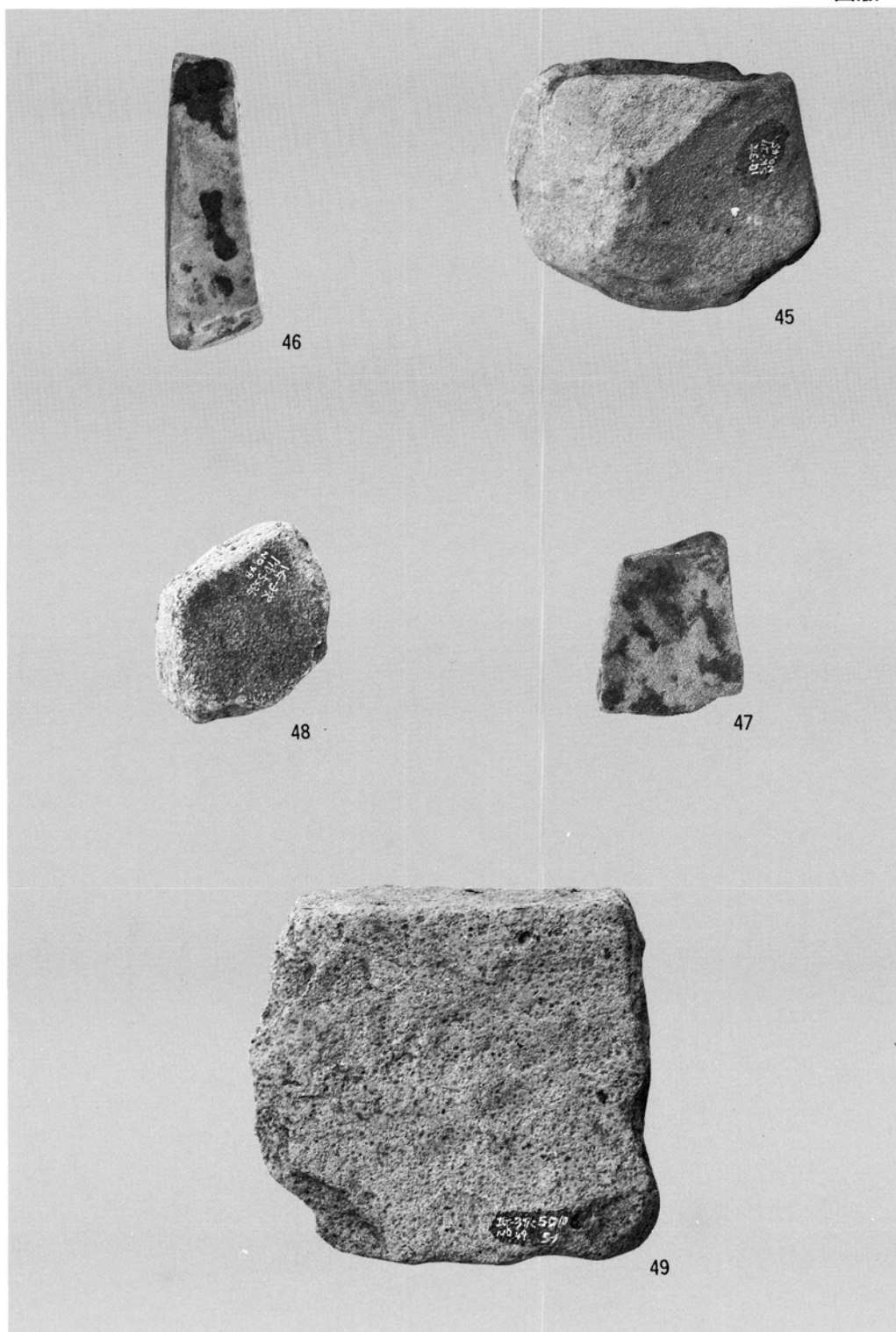
石器類(3)



石器類 (4)



石器類(5)



石器類(6)

福岡市西区
青木遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集

1987年5月31日

編集・発行

福岡市教育委員会

福岡市中央区大名2丁目10の29

印刷

ダイヤモンド印刷株式会社

